

42589

教科書文庫

4
810
51-1926
20003 02260

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

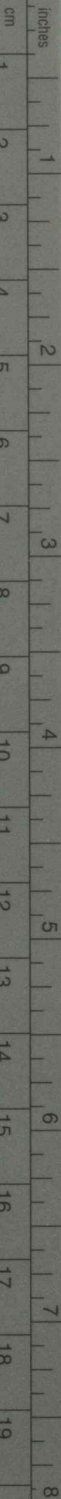


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



編平彌田吉
文國範師
 用部一第
 十卷

教
 5
 20



資

教科書文庫
4
810
51-1926
2000302260

文部省檢定

大正十五年三月十七日 師範學校國語教科用

375.9
Y019

吉田彌平編

師範國文

第一部用

卷十

東京 光風館藏版

広島大学図書

2000302260





師範國文第一部用卷十

目次

一	世界の文學……………	土居光知	一
二	日本の神話……………	藤岡作太郎	四
三	天石屋戸……………	(古事記)	九
四	八岐大蛇……………	(古事記)	六
五	歌の故郷……………	佐々木信綱	三
六	寧樂の匂……………	(萬葉集)	五
	近江の荒都を過ぎし時作める歌……………	柿本朝臣人麿	五
	富士山を望みて……………	山部赤人	四

目次

思子等歌	山上憶良	四
水江浦島子を詠める歌	讀人不知	四
喻族歌	大伴家	四
短歌十五首		四
七 歌の調子	島木赤彦	四
八 惟喬親王	伊勢物語	五
九 文學と宗教	藤岡作太郎	六
一〇 土牢御書	日蓮	七
一一 石つぶて	坪内逍遙	七
一二 人生の快事	三宅雪嶺	七
國文學史		一
序説		一

一 上古の文學	二
二 平安朝時代の文學	二
三 鎌倉室町時代の文學	四
四 江戸時代の文學	四
五 明治時代の文學	六
六 現代の文學	七



師範國文第一部用卷十

一 世界の文學

土居光知

土井光知
英文學者
東北帝國大學教
授

書かれた文學の前に民謡と神話傳説とがある。民謡は情緒生活の何者にも捉はれないきれいな詩歌の本能的な現れてあるが、神話は已に體系をなし、民族の生活や政治状態に影響されるため、民族的・精神的戦争その他特殊の興味が多く加り、人間性の表現の直接さと廣さとに於て著しい差違を生ずる。世界中の神話から人間的の興味の最も饒かて、世界文學の源泉となるものを求めるならば、それはギリシヤ神話であらう。科學的な心

ヴィンケルマン
 ドイツの文學史
 古代美術史を著
 してギリ
 シヤロー
 マの精神
 をドイツ
 に紹介し
 た
 Winckelmann
 (1717-1768)
 ゲーテ
 ドイツの
 詩聖大戯
 曲家
 Goethe
 (1749-1832)

は全く神話からは遠ざかつてゐる。しかし少年の心は、今日に於ても、人類が少年期にあつて人間の運命や自然に對し驚異の眼を見張つた時代の感想に共鳴するのみならず、詩的な心はいつもそれに對し遠い故郷の感をいさぐ。人間的な姿を以て森や海や空をみたした美しいギリシヤ人の想像は、一民族の神話たるに止らず、我々にとつても世界的文學の故郷である。上古の地中海東部沿岸諸國の神話を醇化し綜合して成長したこの神話は、早くより羅馬の神話を同化し、文藝復興の頃から佛英詩人の詩的想像の世界に甦つた。獨逸は久しくゲルマン民族の好戰的な國民的神話を以てギリシヤ神話に對抗せんとした。ヴィンケルマンやゲーテの時代から後者に傾いた。自國民族の神話を忘れることは悲しむべきことであらう。しかし眞

ホーマー
 ギリシヤの
 最古の敘事
 詩人
 Homer

に人間的な最も美しい神話が詩的想像の眞の故郷であつて、自國の神話を維持せんがために、これを黜けることは更に悲しむべきことである。歐洲人の美感はギリシヤ人のそれに影響されてゐる點が非常に多く、歐洲文藝の原型は大部分ギリシヤに發見される。ギリシヤの文學は個々の作品として最早現代のものでないと謂ふべきであらうが、全體として即ちギリシヤの藝術的精神としては決して生命を失つてゐない。敘事詩の中で最も世界的文學の要素を有するはホーマーであらう。ホーマーの興味は他民族の征服や寶の爭奪、奇蹟の續發にあらずして、人間の心の動き方にある。トロイ戦争は人倫が亂されたことに對する英雄達の憤りに起因してゐる。古代人が想像し得たあらゆる誘惑と

オデッセー
イタカ王オ
ディッセウス及
びその子テ
レマカスの
漂流奇談
エイスキロス
アゼンヌ
家の悲劇作
家
Aeschylus
(前525-450)
ソフォクレス
アゼンヌ
の戯曲家
ソフォクレ
ス時代の
アゼンヌ
精神をよくあら
はした
Sophocles
(前465-405)
ユーリピデス
アゼンヌ
の戯曲家
の進歩した
近代風の
悲劇を作つた
Euripedes
(前480-07)

困難に打勝つ英雄の冒険を主題としたオデッセーは、人間を我に語れ、美神よ、見聞廣く、いと多くさすらひたるの語を以て始る。歐洲の文學が常に人間的興味を中心にしてゐることは、それがホーマーに源を發したからであるとも考へられる。次にホーマーに較べると、エイスキロス、ソフォクレス、ユーリピデスの劇詩とプラトリーの對話篇とは更に直接に吾々に訴へる。ギリシヤ劇は人間性の嚴肅な觀照と清澄な表現とを以て勝つてゐる。またプラトリー主義が歐洲の思潮の本流であることは、こゝに述べる必要もないであらう。

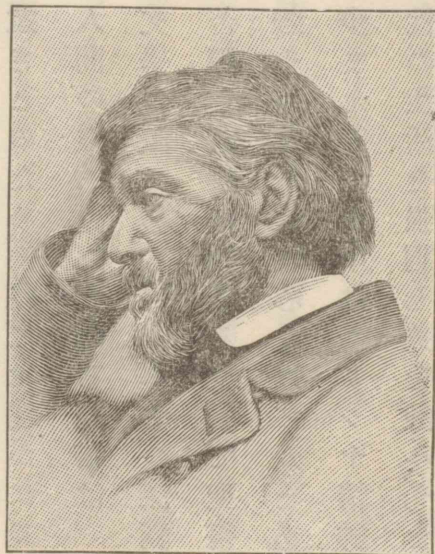
次にラティン文學の中でヴィルギリウス及びホラティウス等は、ローマンス語國の文學に對しては、今に尙勢力を維持してゐるやうであるが、しかし羅馬人が創始した文學は、單に諷詩のみ

プラトリー
アゼンヌ
の最大の
思想家
Plato
(前427-347)
對話篇
辯證法とも
いふ
Dialektikē
ヴィルギリウス
ローマの
詩人
Velgilius
(前70-19)
ローマの
詩人
ホラティウス
ローマの
詩人
Horatius
(前65-8)
Satire
ヘブライ精神
宗教的誠實
と清淨の感
情に富ん
だ猶太精神
Hebrai

で、他は皆ギリシヤより繼承したものである。古代羅馬の詩人達は、我々の世界的文學に對しては、自ら發する光輝の弱さと縁遠さとのため、肉眼では明かに見得ない星群である。

人間の靈的覺醒を語る聖書は、ギリシヤ文學と相並んで世界的文學の源である。すべての深刻な告白の文學、靈と肉との惡戦苦闘を直接に物語る文學で聖書の反響を聞かないものはない。若やかな鋭敏な心を以て人をありのままに見、美と光のうちに歩まんとしたのはギリシヤ精神であつた。嚴肅な心を以て靈性の生活を強調し、美を蝕み、光を覆はんとする闇の力を克服せんとしたのはヘブライ精神である。ギリシヤ主義は美しい理想であるが、それを實現せんが爲には性情の醇化と意志の鍛錬を必要とする。それを缺いたがためギリシヤ精神は享樂に溺

Carlyle (1795-1881) 英國の評論家、哲學家、詩人、小説家、歴史家、批評家、著者など



れて中途にして崩解し、クリストの理想が世を救つた。ギリシヤ主義とヘブライ主義とは歐洲文學の二大源泉であるが、その一方のみで大文學を生むことが不可能であることは、後者が前者を排した紀元後千年間に世界的文學と稱すべきものが全くないことを見ても推せられるであらう。中世以後の偉大な文學は常に兩精神の融合から生れてゐる。文學の方面から言へばヘブライの精神の特性は靈を直接に感ずる力であり、ギリシア精神のそれは觀る力であつて、心の世界を美しい姿で

ラスキン (1819-1891) 英國の美術批評家、社會評論家、近世作家の著者
ホイットマン (1819-1392) 米國の詩人、草の葉陣の中録などの著者
ニイチェ (1844-1900) ドイツの思想家、超人主義を唱へた
ツアラウスト Nietzsche (1844-1900) シェクスピア (1564-1616) 英國第一の劇詩人

満たす。前者は文學の内容を深め、後者は容姿を整へる。之を詩の形律の方から考へると、前者は心の直接なリズムを響かせるが、後者は整齊を保つ詩形の中に内容を盛りんとする。前者は散文詩となり、後者は高雅な定形詩となる。前者の影響を全然拒んだ歌からは、軽い調子と修辭的な印象をうけがちである。カーライル・ラスキンを始め莊重な詩的散文の大家は聖書の調子に感化されてゐるが、ホイットマンの散文詩、ニイチェのツアラウストにさへもその反響が聞かれるであらう。文藝復興の精神は、南歐に於ては主として繪畫彫刻及び建築に表現されたが、その文學としての表現はエリザベス朝の文學特にシェクスピアに見られる。こゝにこの世界的に知られた劇詩人に就いて紹介する必要はない。彼の作は殆ど各國語に譯

Don Quixote	Hamlet	Faust	フ ァ ウ ス ト
イスパニアの大文學者セルヴァンテスが十六世紀の社會を諷刺的に寫したものである	シエクスピヤー一六〇二年の作 ク ロ マ ン テ ッ ク な 悲 劇	近代文學の生の大作家といふ畢つて完成したといふ	ゲーテが六十年もかゝつて完成したといふ畢つて完成したといふ



ア
ビ
ス
ク
エ
レ
ア
ッ
ト
ド
ン
キ
ホ
テ
の
如
き
眞
に
生

七世紀の後半から十八世紀の終に至るまでの文學は世界的に不朽な作品を出さなかつた。それはファウスト・ハムレット・ドン・キホテの如き眞に生

ける人間の姿を一つも生まなかつた。併しこの時代は文學の自意識を喚びさまし、古典文學の價値を明かにし、理知に重きを置いて文學を空想の夢中遊行から喚びさまし、心理的省察の尙

され、その國の文學の寶となりつゝある。濶やかに捉はれざる心を以て人生をありのままに見、それを劇に表現するとは如何なる事であるかを、近代人に教へたのは彼である。

Rousseau	Gelliver's	Swift	Robinson Crusoe	Defoe	デ ッ フ ォ
(1712-1778)	Travels	(1667-1745)	ス ウ ィ フ ト	(1661-1731)	英 國 の 小 説 家
著者 の 機 悔 録 の 思 想 家 エ ミ ール	フ ラ ン ス	ガ リ ヴ ァ 旅 行 記	アイ ル ラ の 小 説 家	ロ ビ ン ソ ン 漂 流 記	

ぶべきことを教へた。かくて韻文を以てする空想物語の時代は去り、文學ではデッフォのロビンソン漂流記、スウィフトのガリヴァ旅行記等に始る小説の時代となつた。十七八世紀は精密明晰な散文を創始した時代である。

この文學は十八世紀の末葉において一大展開をなした。ルッソーはこの客觀的明晰と心理的省察に富んだ散文を抒情詩の領域へとり入れ、心情の世界を對象とし、かつてなき直接さと精密さを以て心の展開を描き、自己を告白した。この告白の文學を更に進めたのはゲーテである。彼は、ヴェルテルの悲みに於て先づこれを試み、内的生活の最も多様で直接な抒情詩を世界文學に寄與し、世界精神を體驗するファウスト及びヴィルヘルム・マイスターを書いた。ルッソーの考では、社會は自由平等な

ヴィルヘルム
マイスター

Wilhelm Meister

トルストイ

Tolstoy
(1828-1910)

ロシアの思想家小説家熱烈な人生の研究博愛主義者



(作ルベツリト)テ-ゲ

る個人の集合であつて、個人の自由と幸福とを増進することが理想であつた。ゲ-テも自我の充實した、自由な展開を人生の目的と信じ、ファウストの第一巻、マイスターの前篇にこの精神を表現したが、親和力には個人の要求とより高き要求との衝突が描かれ、マイスター及びファウストの後篇には個人の要求を超越して、人間のため、全體のために生くべきことを説き、已に理想的な民衆主義を暗示した。現代に於て此の思想の展開を繼承する文學は何處にあるかといふことに關しては、見る人によ

ゴ-ゴリ

Gogori
(1809-1852)

ロシアの小説家戯曲作家ロシアの現代社會を寫した作家

ゴルキ

Gorky
(1868-)

ロシアの小説家下層社會を寫した作家

ツルゲネフ

Turgenieff
(1818-1883)

ロシアの小説家當時のロシアの社會を如實に寫した作家

ドストエフスキ

Dostoyevsky
(1821-1881)

ロシアの小説家病理學的的小説の作者

つて意見を異にするであらうが、それはゲ-テの青年期の思想と晩年の理想、或はニイチ-ェに共鳴する精神の所有者とトルストイに共鳴する精神の所有者、そして兩者を融合せんとする人の文學でないであらうか。自然主義の時代以後我國の文學に最も親密な交渉を有するのは、フランスの文學と北歐の文學であつた様に思はれるが、文明の病氣をかたる弛緩した享樂の文學は永遠のものでない事を感じる。ロシア文學に於ては、原始時代の様に素朴な心と極端に進んだ心とが一緒になつてゐる。其の中でも特に興味をひくのはゴ-ゴリからゴルキに至る中間であつて、西歐の教養からロシアの民衆を顧みて、それに歸らんとしたツルゲネフ、スラヴの心のうちにひそみ没我的な人間の愛を育んだドストエフスキ、ロシアの農民を眺め、そ

イブセン (1828-1906)	Ibsen (1828-1906)	ビョルンソン	Björnson (1832-)	ストリンダベル	Strindberg (1849-)
ノルウェーの戯曲家 詩人 社会劇作家 作つて現代生活を解剖した	ノルウェーの戯曲家 詩人 社会劇作家 作つて現代生活を解剖した	ノルウェーの小説家 戯曲家 初は郷土文學後に社会劇	ノルウェーの小説家 戯曲家 初は郷土文學後に社会劇	スウェーデンの小説家 初は極端な下層主義後に神秘主義	スウェーデンの小説家 初は極端な下層主義後に神秘主義

ここにたゞ人間を眺めたトルストイである。そして方面を異にするが、三人とも人間の心の動き様を深刻に透察する比類なき心眼を有してゐた。この三人を思ふとき、想ひ出すはスカンディナヴィアの三人イブセン・ビョルンソン・ストリンダベルヒである。トルストイ等の人道的な心に對照すると、イブセン等はニイチエの代表する思潮の繼承者であることを感じる。以上が歐洲文學の主脈の目標となる高峯とすれば、如何にしてそれらに親しみ得るであらうか。ソフォクレスやプラトンは我等の世界から遠く離れてゐる感はあるが、近づけば親しさの感が深まつて来る。まともに人間を表現する民衆主義なロシヤの文學は、何れの國民に對しても傳統の隔てをおかぬ。シエクスピア及びゲーテもまた潤やかな心を以てあらゆる人に語

土は(高知縣)
自由民権主義 (改正)

る要素をもつてゐる。そして年久しく注意深く耳を傾ける人には常に新しく、より深きことを語るであらう。若し我々が西洋人のなしたるが如き自我の覺醒を経験すれば、わが文學も西洋文學と等しき要素をより多く持つことになるであらう。即ち靜寂主義的なもの、自然の愛を中心にしたものは遠ざけられて、自由な我的表現、人間性の表現である如き文學が重んぜられるであらう。只傳統を尙ぶとき、文藝は自己の世界を狭める。傳統を無視するとき、過激な精神の渦巻を惹起し、蕪雜にして怪奇なる作品をもまた多く生ぜしめる。文藝の傳統を保ち、高雅な教養をもつことが必要であるとすれば、わが文藝の傳統を出来るかぎり宏濶な世界的なものとならしめねばならぬ。(文學序説)

二 日本の神話

藤岡作太郎

藤岡作太郎
國文學者
東京帝國大學文
科大學助教授
文學博士
金澤市生
明治四十三年歿
年四十一

日本の神話は天地開闢説、自然物化生を以て始る。天地まづ開けて天神地祇生じ、ついでもろくの天然物化生してまた神とはせられたるなり。たとへば山は山祇、海は綿津見、火は軻遇突智、水は速秋津姫、木は句々、廼馳、土は埴安、風は級長、戸邊、五穀は歳神といへる類にして、この天然神話の事歴は天上即ち高天原を以てその舞臺となしたるが、いつしか下りて豊蘆原即ち地上の事とはなりぬ。これと同時に天然神話は一變して英雄神話となりしが如し。素戔嗚尊は實にこの過渡期の代表者にして、尊の豊蘆原に下りたまひしが、恐らく人間界の始なるべし。そもく、太古の思想を以て人間發生の原由を尋ぬるに、高天原に在りて罪を得しもの、この土に追はれて人間となる。すなは

大國主命
素戔嗚尊の子又
は六世の孫とい
ふ
大己貴命大物主
神ともいふ
彦火々出見尊
彦火瓊杵尊の
子

ち神の墮落やがて人間の發生なり。そのいはゆる罪にはいろ
いろの天つ罪國つ罪ありて、これを贖ふには爪髪を裁りて潮水
に浴し、贖物と稱へて種々の供物を奉る。これ全く心靈と物質
との二面を混同したるものなりといへども、當時の人ほとにか
くこれを以て贖罪の手段と思惟したるなり。素戔嗚尊も高天
原にありて、罪を犯し、贖罪を終へて清淨の身となりたまひしが、
なほこれが爲に人間界に墮落せざるを得ず、出雲國に至りて、簸
川上に八岐蛇を退治し、奇稻田姫を迎へて妻としたまふ。思ふ
に尊は大國主命及び彦火々出見尊と共にわが英雄神話中の最
大立物にして、恰も神代三幅對の觀あり。すべて鬭争に端緒を
開きて結婚に局を結ぶは、洋の東西を通じたる英雄神話の一般
性質にして、素戔嗚尊は大蛇と戦ひ、大國主命及び彦火々出見尊

は兄弟と争ひて、これに勝ち、さていづれもその慕へる麗姫を娶るに至る。この英雄神話の内容たるや、強ち荒唐無稽なる空想の所産とのみしも思はれず、實際の歴史的分子ももとより混れるなるべく、この歴史分子を経として、織るに他の神話傳説の緯を以てせるものなること、蓋し疑を容れず。

記・紀に最も多きは、人生・風俗・物名・俚諺等を解説せる説明神話ともいふべき者にして、古事記に、高天原より遣はされたる雉子が、途に射殺されて、使命を全うする能はざりし事を記して、雉子の頓使といふことを明かにし、伊弉冉尊がわれ黄泉に至りて日に千人を殺さんと仰するに、伊弉諾尊が、さらばわれは日に千五百の産屋を作らんと宣ひし事を引ききて、生者の數の常に死者にまされるを説くの類にして、茅渟の海、奈良の都等の地名を解釋説

明せるが如きもみなこれに屬す。また別に一種動物説話とも名づくべきものあり、隱岐より出雲に移らんとする兎が一策を案じ、鰐を欺きて、われらが家族は孰れか數多き、卿等まづ一族を連れて海に浮べ、われうち渡りて數へ見んとて、鰐が唯々として橋を成す上を躍り越え、將に上らんとする時、鰐の愚直を嘲り、却て捕へられてその衣を剝がれたりといへる稻羽の白兔の傳説、また牡鹿が一夜その身に霜ふりかゝると夢み、覺めて何の祥ぞとその妻に謀るに、牝鹿答へて、これやがて御身が鹽漬になるべき前兆なりといひしが、のち數日果して獵人の爲に射殺されたりといへる、後世小説の濫觴とも稱せらるゝ夢野の鹿の傳説の如き、即ち是なりとす。

いづれの國にありても、思想の單純なる時代における神話は、そ

の國に特有にして他國に類例なしといふべきもの甚だ少なし。わが國の神話亦この例に洩れず。概括して論ずるに、わが太古の神話の多くは天孫種族が僻遠の海濱に放浪して、未だ大和に定着せざりし以前早く既に傳はりたるものにして、近畿地方に於て始めて發生したるものにあらざるは、蓋し明かなり。海洋に關する説話の多きこと之を證す。伊弉諾伊弉冉の二尊が天の浮橋に立ちて、矛を下して海水を探り給ひしは言ふに及ばず、御禊を行ふに海岸に於てして、河に浴すといはざるが如き、或は潮干る珠潮満つ珠の傳説の如き、その他船といひ、鰐、鰐は我が海岸には産ぜず、或は鱻の類ならんといへり、といふの類、一々擧ぐるは煩に堪へず。また、由來宗廟を重んじ祖先を敬ふはわが國民固有の美風、記紀の記事には隨處にこれを窺ひ得べきが、神話

もまた天照大神の御稜威及び天孫降臨の偉蹟を以て主眼となし、八百萬の神々いまだ曾て大神に對して背叛の言動ありしを傳へず、常にその旨を奉體して從順の意を表はせりとす。以てわが國體の動かすべからざるものあるを知らしむると共に、太初よりわが社會組織の家族制に成りて、族制政治の行はれたるを首肯せしむ。諸神の名を擧ぐるに當りても、必ずこれが後世の何氏の祖たるを明かにせるが如き、また以て祖先を尊崇する念のいかに篤かりしかを證するにあらずや。(國文學史講話)

三 天石屋戸

この時伊邪那岐命、いたく歡ばして、詔りたまはく、あれは御子生

頸珠
玉を緒に貫いて
頸にかけるもの

み生みて生みの終に、三柱の貴の御子を得たり。と詔りたまひて、即ちその御頸珠の玉の緒もゆらに取りゆらかして、天照大御神に賜ひて詔りたまはく、汝が命は、高天の原を知らせ。と事依さして賜ひき。次に月讀命に詔りたまはく、汝が命は、夜の食國を知らせ。と事依さしたまひき。次に建速須佐之男命に詔りたまはく、汝が命は海原を知らせ。と事依さしたまひき。かれおのもく、依さしたまへる命のまに、知ろしめす中に、速須佐之男命依さしたまへる國を知らさずて、八拳鬚、心前に至るまで啼きいさちき。その泣きたまふさまは、青山を枯山なす泣き枯らし、海河はことく、泣き乾しき。こゝをもて、荒ぶる神の音狭蠅なす皆わき、萬づの妖ことく、におこりき。かれ伊邪那岐大御神、速須佐之男命に詔りたまはく、何とかも汝は事依

根の堅洲國

黄泉の國

多賀

近江國犬上郡多

賀村官幣大社多

賀神社

那勢

男子を親しんで

いふ語

みづら

上代の男子の髪

の結び方

髪を頭の中央で

左右へ分けて耳

の處で箱ねて真

中を緒で結んで

垂れるもの

後にはびんづら

といふ

須麻流

統の意で緒を貫

くこと

させる國を知らさずて、哭きいさちる。と詔りたまへば、申したまはく、あは、妣の國、根の堅洲國に罷らむとおもふが故に、哭く。と申したまひき。こゝに、伊邪那岐大御神、いたく怒らして、然らば、汝は此の國にはな住みそ。と詔り給ひて、乃ち神やらひにやらひ給ひき。かれ伊邪那岐大御神は、淡海之多賀になまします。かれこゝに、速須佐之男命申したまはく、然らば、天照大御神にまをして罷りなむ。と申したまひて、乃ち天にまるのぼります時に、山川ことく、に動み、國土皆揺りき。こゝに、天照大御神聞き驚かして、あが那勢命の、のぼり來ますゆゑは、必ずうるはしき心ならじ、あが國を奪はむとおもほすにこそ。とのり給ひて、即ち御髪を解き、御みづらに纏かして、左右の御みづらにも、御鬘にも、左右の御手にも、みな八尺、勾璉の五百津、美須麻流の珠をまきもたし

千入
千匳入

矢を盛つて背に
白ふ具
柄
弓を射るとき左
の脇につける半
月形の皮具

て背には千入の鞆を負ひ、五百入の鞆をつけ、また稜威の高鞆を
取りおぼして、弓腹ふりたて、堅庭は向股に踏みなづみ、沫雪な
す蹴る散かして、伊都の男建び踏み建びて、待ち問ひたまはく、何
とも上りきませる。と問ひ給ひき。こゝに速須佐之男命申し
たまはく、あは邪き心なし。唯大御神の命もちて、あが哭きいさ
ちることを問ひたまひし故に、申しつらく、あは妣の國にまから
むと思ひて哭く。と申し、かば、大御神、汝は此の國にはな住みそ。
と詔りたまひて、神やらひやらひたまふ故に、罷りなむとするさ
まを申さむと思ひてこそまゐりつれ。けしき心なし。と申し
たまへば、天照大御神、然らば、汝の心の清明きことは如何にして
知らまし。とのりたまひき。こゝに速須佐之男命、おのもく、う
けひて、御子生まな。と申したまひき。

うけひ
誓ひ
天の安河
高天原にある河

かれ爾に、おのもく、天の安河を中におきて、うけふ時に、天照大
御神まづ建速須佐之男命の佩かせる十拳の劔を乞ひわたして、
三段にうち折りて、ぬなともゆらに、天の眞名井に振り滌ぎて、
さがみにかみて吹き棄つる氣吹の狭霧になりませる神の御名
は、多紀理毘賣命、又の御名は奥津島比賣命とまをす。つぎに市
寸島比賣命、またの御名は、狭依毘賣命とまをす。次に多岐都比
賣命。速須佐之男命、天照大御神の左のみ、づらに纏かせる八
尺の勾璫の五百津のみすまるの珠を乞ひわたして、ぬなともも
ゆらに、天の眞名井にふり滌ぎてさがみにかみて吹きうつる氣
吹の狭霧になりませる神の御名は、正勝吾勝速日天之忍穗耳
命。また右のみ、づらに纏かせる珠を乞ひわたして、さがみに
かみて、吹きうつる氣吹の狭霧になりませる神の御名は、天之菩

卑能命。また御かづらに纏かせる珠を乞ひわたして、さがみにかみて、吹きうつる氣吹の狭霧になりませる神の御名は、天津日子根命。又左の御手に纏かせる珠を乞ひわたして、さがみにかみて、吹きうつる氣吹の狭霧になりませる神の御名は、活津日子根命。また右の御手にまかせる珠を乞ひわたして、さがみにかみて、吹きうつる氣吹の狭霧になりませる神の御名は、熊野久須毘命。こゝに天照御大神、速須佐之男命にのりたまはく、この後にあれませる五柱の男子は、物實あがものによりてなりませり。かれおのづから吾が御子なり。さきにあれませる三柱の女子は、物實汝のものによりてなりませり。かれ乃ち汝の御子なり。かく詔り別けたまひき。

こゝに速須佐之男命、天照大御神に白したまはく、あが心清明き

忌服屋
神に厭る衣を織る
清浄な御殿

故に、あが生める御子、手弱女を得つ。これによりて申さば、おのづから吾勝ちぬ。といひて、勝ちさびに、天照大御神の御營田の畔放ち、溝埋め、またその大嘗きこしめす殿に、尿まり散らしき。かれしかすれども、天照大御神は、咎めずてのりたまはく、尿なすは酔ひて吐きちらすところ、あがなせの命、かくしつらめ。又田の畔放ち、溝埋むるは、地をあたらしところ、あがなせの命、かくしつらめ。と詔り直したまへども、猶その悪しき態止まずてうたてあり。天照大御神、忌服屋にましく、て、神御衣織らしめたまふ時に、その服屋のむねを穿ちて、天の斑馬を逆剝に剝ぎて、墜し入るときに、天衣織女見驚きて、みうせにき。かれこゝに、天照大御神見畏みて、天の石屋戸を閉て、さしこもりましく、き。すなはち高天、原皆暗く、葦原、中國ことゝに闇し。是によりて、常夜

高御産巢日神

高天原に始めて
生れ出でた三柱
の神の一

思兼神

多くの人の思慮
を一人で兼ね有
つほど智慧のあ
る神

長鳴鳥

雞

天の香山

高天原にある山
それが後に二つ
に分れて伊豫と
大和に落ちて來
たといふ

和幣

ゆふともいふ
楮や麻の繊維で
織つた布

ゆく。こゝに萬づの神のおとなひは、狭蠅なす皆わき、萬づの妖
ことくにおこりき。
こゝをもて、八百萬の神、天安之河原に神集ひ集ひて、高御産巢日
神の御子、思兼神に思はしめて、常夜の長鳴鳥を集へて、鳴かしめ
て、天の安河の河原の天の堅石を取り、天の金山の鐵を取りて、鍛
人天津麻羅をまぎて、伊斯許理度賣命におほせて、鏡を作らしめ、
玉祖命におほせて、八尺の勾璫の五百津の御須麻流の珠をつく
らしめて、天兒屋命布刀玉命をよびて、天の香山の眞男鹿の肩を
うつぬきに抜きて、天の香山の天のはかを取りて、うらへまか
なはしめて、天の香山の五百津眞賢木をねこじにこじて、上枝に、
八尺の勾璫の五百津のみすまるの玉を取りつけ、中枝に八尺鏡
をとりかけ、下枝に白和幣青和幣をとり垂てて、このくさくさの

日蔭

日蔭のかづら
まきさき
正木のかづら
つるまきさき

ものは、布刀玉命、太御幣と取りもたして、天兒屋命、太祝詞言ねぎ
申して、天手力男神、御戸のわきに隠り立たして、天宇受賣命、天の
香山の天の日蔭をたすきにかけて、天のまさきを鬘として、天の
香山の小竹葉を手草にゆひて、天の石屋戸にうけ伏せて、踏みと
どろこし、神がかりして、胸乳をかきいで、裳紐をおしたれき。か
れ高天の原ゆすりて、八百萬の神共に笑ひき。
こゝに天照大御神、怪しとおもほして、天の石屋戸を、ほそめに開
きて、内よりのり給へるは、吾がこもりますによりて、天の原おの
づから聞く、葦原中國も、皆聞からむとおもふを、何とかも天宇受
賣はあそびし、また八百萬の神もろくわらふぞとのり給ひき。
乃ち天宇受賣、なが命にまさりて、貴き神いますが、故に、ゑらぎあ
そぶと白しき。かくまをす間に、天兒屋命、布刀玉命かの鏡をさ

尻久米繩
注連繩

千位置戸
千座にのせた澤
山な贖罪の品

鳥髮
出雲國仁多郡鳥
上山
今船通山といふ
出雲の東南で伯
耆の國境にある
簸川はこゝから
出て下流は宍道
湖に入る

しいてて天照大御神に見せまつる時に、天照大御神、いよゝあやしとおもほして、稍戸よりいでて臨みます時に、かの隠り立てる天手力男神、その御手を取りて、引き出しまつりき。乃ち布刀玉命、尻久米繩をその御後方にひきわたして、こゝよりうちにな還り入りましそと白しき。かれ天照大御神、出でませる時に、高天の原も、葦原中國もおのづから照りあかりき。こゝに八百萬の神共に議りて、速須佐之男命に、千位置戸を負せ、また鬚を切り、手足の爪をも抜かしめて、神やらひにやらひき。(古事記)

四 八岐大蛇

かれ遣らはれて出雲の國の簸川上なる鳥髮の地に降りましき。

高志
田雲國簸川郡古
志
今市町の南一里
ほど

この時しも箸その川より流れ下りき。こゝに須佐之男命その川上に人ありけりと思ほして、まぎ上り出でまし、かば、翁と媼と二人ありて少女を中にすゑて泣くなり。乃ち、汝たちは誰ぞと問ひたまへば、その翁、吾は國神大山祇神の子なり。吾が名は足名椎、妻が名は手名椎、女が名は櫛名田姫と申すと申す。また汝の泣くは何ぞと問ひたまへば、吾が女は元より八少女ありき。こゝに高志の八岐大蛇なも年毎に來て食ふなる。今それ來ぬべき時なるが故に泣くと申す。その形はいかさまにかと問ひたまへば、それが目は赤酸醬なして、身一つに頭八つ、尾八つあり。またその身に蘿また檜杉生ひ、その長さ谷八谷、丘八丘をわたりて、その腹を見れば、ことごとく、にいつも血流えて爛れたり。と申す。かれ須佐之男命その翁に、これ汝の女ならば、吾に奉らんや。との

湯津爪櫛に取成
して
五百個爪櫛に化
八鹽折の酒
幾度も折返して
醸した強い酒

りたまふに、畏けれど、御名を知らず」と申せば、吾は天照大御神の弟なり。かれ今天より降りましつ」と答へたまひき。こゝに足名椎、手名椎の神、しかまさば、畏し、奉らむ」と申しき。かれ須佐之男命、乃ちその少女を湯津爪櫛に取成して、御警に挿さして、その足名椎、名手椎の神にのりたまはく、汝たち八鹽折の酒を醸み、また垣を作りもとほし、その垣に八つの門を作り、門ごとに八つの假殿を結び、その假殿毎に酒槽を置きて、槽毎にその八鹽折の酒を盛りて待ちてよ」とのりたまひき。かれのりたまへるまゝにして、かく設け備へて待つ時に、その八岐大蛇まことに言ひしがごと來つ。乃ち槽毎におのもゝ頭を垂れて、その酒を飲みき。こゝに飲み酔ひて皆伏し寐たり。乃ち須佐之男命、その御佩させる十握劍を抜きて、その蛇を切り散りたまひし

草薙の大刀

日本書紀の一書
に本名天叢雲劍
蓋し大蛇の居る
上に常に雲氣が
あつたので名づ
けたのである
日本武尊に至り
て太刀の名を改
めて草薙劍と曰
ふ

かば、簸川血になりて流れき。かれその中の尾を切りたまふ時、御刀の刃缺けき。怪しと思ほして、御刀のさきをもちて刺し裂きて見そなはし、かば、大刀あり。かれこの大刀を取らして、怪しきものぞと思ほして、天照大御神に申し上げたまひき。こは草薙の大刀なり。

かれ、こゝをもて、その速須佐之男命、宮造るべき地を出雲の國に求ぎたまひき。こゝに須賀の地に到りまして、のりたまはく、吾こゝに來まして、吾が心すがゝし、とのりたまひて、そこになも宮造りてましゝける。かれそこをば、今に須賀とぞいふ。この大神初め、須賀の宮造らし、時に、そこより雲立ちのほりき。かれ御歌よみしたまふ。その歌は、
やくも立つ、出雲八重垣つまごみに八重垣作る、その八重垣を。

こゝにかの足名椎神を召して、汝は我が宮の首たれ。とのりたまひき。また名を稻田宮主須賀之八耳神と負せたまひき。(古事記)

五 歌の故郷

佐々木信綱

古來、歌集は多いけれども、その想の純眞にして豊富、簡素朴實のうち、に人心の本然の基調を傳へて、さながら歌の故郷といふべく、詩歌の不朽の生命の源泉をなせるものは萬葉集である。

萬葉集といふ名の意義に就いては、萬の世といふ説と、萬の言の葉といふ説と二つある。何れも當時流行した文選淮南子等の漢籍の中からその出典は發見される。兩説とも一理あつていづれを正しいとも定め兼ねる。併し今傳はつてゐる二十卷の

佐々木信綱

國文學者

歌人

文學博士

明治五年伊勢國生

文選

三十卷

梁の蕭統撰

周以後六朝の文章詩賦を蒐めたもの

淮南子

二十一卷

漢の淮南王劉

安の撰

大伴家持

歌人

中納言

延暦四年(四四三)薨

雜然たる歌集の名稱としては、萬代に傳へるといふ意を寓した萬世に解するよりは、萬の言の葉をあつめた集と解しておく方が、吾人に適當な感じを與へる。

撰者は大伴家持で、而も私撰、かつ草稿のままに傳はつたもので、未だ十分整理をしないのである。併し草稿のままに、精撰してないといふことが、歌集であるだけに、少しの障も無いのみならず、却て當時のいろ／＼の歌風が窺はれて面白いのである。萬葉集が精撰を経ずに傳はつたのは寧ろ吾人の幸福である。草稿だけに、その體裁も半ば整ひ、半ば整はぬ。卷數二十卷、卷々の歌數は固より一定せぬ。分類は雜歌・相聞(戀)・挽歌(哀傷)・譬喩・四季・雜歌等の目であつて、それを更に年代によつて次第するのが撰者の素志であつたらしい。併しかゝる標準の明かに守られ

て居るのは小部分に過ぎぬ。
 歌體からいへば、長歌二百六十二首、短歌四千百七十三首、旋頭歌六十一首となる。長歌、旋頭歌が斯く多くあるのは、此の歌集の特色である。

時代は奈良朝更に詳しくは藤原朝、持統文武——二十三年間、奈良朝、元明より淳仁に至る——四十八年間、合計約七十一年間を代表し、集中の歌は概ね其の間の作で、而も短い藤原朝の間の作は、長い奈良朝の歌に比して數が多いやうに思はれる。併し一々の歌に就いては、持統以前の作もかなり有り、最も古くは仁徳、允恭、雄略三帝の時代の作もある。

作者は其の名の知られたものと知られないものと相半ばし、知られたものに就いて見るに、上は帝王、皇后、皇族、大官より、下は庶

人、遊女、乞食等にわたる有らゆる階級の人を含んでゐる。これもまた後世の勅撰集に見ぬ此の集の特色である。

其のうたはれた題材から見ると、地理的に言へば北海道を除いて殆ど日本全國にわたつてゐる。大和をはじめ近畿を中心として、東海、東山、西海、北陸、南海、山陽、山陰諸道の、諸國の地名、風土は凡てうたはれてゐる。品物的に言ふと、鳥獸、魚介、草木の類から器財、衣食に至るまで、凡て取扱はれてゐる。是だけでも萬葉集の歌が當時の人々の日常生活の凡てと交渉して居た事がわかる。それで後世の歌に見るやうな特別な歌題といふものが未だ無かつたので、其の歌はいづれも當時の人々の實際の經驗と交渉して居る。要するに歌と言へば、特殊の人士が花鳥、風月の風流とか、名所とか、又一定の題目とかによつて、想を構へたもの

となつて了つた後世の狭い題詠とはまるで違つてゐる。それだけに歌として見て到底後の歌に見得べからざる面白みがある。

終に奈良朝文明に於ける萬葉集の位置に就いて一言しようと思ふ。抑、奈良朝といふのは、今更言ふまでもなくわが國の文明上の黄金時代もとよりその文明は専ら帝都に限られてゐて、範圍の狭いものであつたが、丁度現今の我が國が、歐米諸國の文明を採入れて立派な發達をしてゐるやうに、當時はその頃隆盛の域にあつた支那の文明を採入れて光彩まばゆき有様を呈してゐた時代であつた。

この奈良朝の文明が後代に遺した殆ど不滅の事業として萬世に傳へなければならぬものがある。これは一般の文明が進歩

した後代もしくは今後に於ても、永久にその光彩を失はぬのであらうと思はれる。それは何であるかといふに、當時の美術と文學とである。而して文學とは、即ちこの萬葉集の歌である。奈良に遊んで、千年の風雨に堪へて今なほ當時の偉觀を偲ばしめる幾多の建築物、彫刻物を觀た人は、我等の祖先が、上世に有した立派な文明にまのあたり接して、一種神往の感に打たれざるを得ぬであらう。而して萬葉集はかの藥師寺の建築、彫刻、東大寺の大佛、三月堂の諸佛像等と同じ時代に、出來たのである。萬葉集の作者も、彼等美術家も、共に同時代の人である。彼等によつて實に奈良朝文明は生み出されたのである。而も更に萬葉集の作者と、彼等美術家とが、それ／＼奈良朝文明について有する位置と意義とを考へると、大いに異なるものがある。蓋し、彼

等美術家が國民の少數者たる天才であり、しかも多くは三韓支那の歸化人もしくはその子孫であつたのに、彼等萬葉の作者は當時の國民一般であつたといふことである。この點に於て、吾人は萬葉集によつて當時の我が日本國民の感情といひ、氣力といひ、知識といひ、道義的觀念といひ、國民性といふものを、血と肉とに於て感ずることが出来るのである。しかも或はその美しさに於て、或はその雄々しさに於て、或はその敏さに於て、或はその敦厚といふことに於て、我が上代人の國民性は歴史上大に貴しとすべきものであつた。この事は、實に吾人が萬葉集によつて知り得るところであると同時に、その故を以て萬葉集は實にかの諸美術品にもまして一層貴重なる人間的創作たるを得るのである。

萬葉集を有するは實に我等國民の誇である。(萬葉集選釋)

六 寧樂の句 (吉良)

近江の荒都を過ぎし時詠める歌 柿本朝臣人麿

玉襷^{タマツ}敵火^{トクヒ}の山の

あれまし、神のことく、

天の下知ろしめし、を、

あをによし奈良山をこえ、

天さかる鄙にはあれど、

さゝなみの大津の宮に

すめろぎの神のみことの

樞原^{セウゲン}のひじりの御代ゆ

樛^ユの木^{ノキ}のいやつぎくに

空^{ソラ}にみつ大和^{オホワ}をおきて、

いかさまに思ほしめせか、

いはゞしの近江^{オホミ}の國の

天の下知ろしめしけむ。

大宮^{オホミヤ}はこゝと聞けども、

近江の荒都 天智天皇の都さ
れた近江の滋賀
の大津宮の舊址
近江國滋賀郡滋
賀村崇願寺の地
處といふ
大津市の北半里
柿本人麿
飛鳥藤原時代の
歌聖
持統文武兩帝ご
ろの人
奈良山
奈良の北にある
山

辛崎
滋賀の都のすぐ
そば湖岸

大殿はこゝと言へども、
霧立つ春日の霧れる。
見れば悲しも。

反歌

春草の繁く生ひたる、
もゝしきの大宮所
傳所大宮のまゝに
破白

さゝなみの滋賀の辛崎さきくあれど、大宮人の
船待ちかねつ。
さゝなみの滋賀のおほわだ淀むとも昔の人に
またも逢はめやも。

富士山を望みて

山部 赤人

天地のわかれしときゆ、
駿河なる富士の高嶺を、
渡る日のかげも隠ろひ、
照る月の光も見えず、
神さびて高く貴き
神めく(神指)神

山部赤人
奈良時代の歌聖
聖武帝に仕へた

山上憶良
藤原奈良時代の
歌人

遺唐使の随員
筑前守
天平五年(七三三)
歿

年七十四

等思衆生
吾觀二衆生二無二
偏黨一如二羅怛
羅。愛無レ過レ子。
誰不レ愛レ子乎。
(最勝王經)
羅喉羅
釋迦の子
Rahula
十大弟子
の一人

白雲もい行きはばかり、
時じくぞ雪はふりける。
語繼ぎ言繼ぎ行かむ、
富士の高嶺は。

反歌

田兒の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ富士の
たかねに雪はふりける。

思子等歌

山上憶良

釋迦如來金口正説、等思衆生、如羅喉羅、又説愛無過
子。至極大聖尙有愛子之心。況乎世間蒼生誰不愛子
乎。

宇利波米婆、胡藤母意母保由。
久利波米婆、麻斯提斯農波由。
伊豆久欲利、枳多利斯物能會。

麻奈迦比爾、母等奈可々利提、
夜周伊斯奈佐農。

反歌

銀母 金母 玉母 奈爾世武爾、
麻佐禮留多可良、古爾斯迦米夜母。

水江浦島子を詠める

讀人不知

春の日の霞める時に、

澄の江の岸に出て居て、

釣船のたゆたふ見れば、

古の事ぞ思ほゆる。

水の江の浦島の子が、

鯉釣り鯛釣りほこり、

七日まで家にも来ずて

海坂を過ぎて漕ぎ行くに

海神の神の處女に

たまさかに漕ぎ向ひ、

相語らひ事成りしかば、

搔結び常世に至り、

澄の江
丹後國竹野郡網
野町にあるといふ

海神の神の宮の

内の邊の妙なる殿に

携はり二人入り居て、

老いもせず死にもせずして、

永久に在りけるものを、

世の中の愚人の

吾妹子に告りて語らく

暫くは家に歸りて、

父母に言をも告らひ、

明日のごと吾は來なむと

言ひければ妹が言へらく、

「常世邊に復歸り來て、

今のごと逢はむとならば、

此の櫛笥開くなゆめと

そこらくに固めしことを

澄の江に歸り來りて、

家見れど家も見かねて、

里見れど里も見かねて、

怪しみと其處に思はく、

「家ゆ出でて三年の程に

垣もなく家失せめやも、

此の筥を開きて見てば

舊のごと家はあらむと

玉櫛笥少し開くに、

淡海三船

神武天皇以
おのれ早も

喻族歌
出雲守大伴古磨
悲が淡海三船の
讒言によつて免
官された時家持
が大伴氏の一族
に諭した歌

白雲の宮より出でて
立ち走り叫び袖振り、
忽ちに心けうせぬ。
黒かりし髪も白けぬ。
後つひに命死にける
家どころ見ゆ。

常世邊にたなびきぬれば、
臥い轉び足摺りしつゝ、
若かりし肌も皺みぬ。
ゆりくは息さへ絶えて、
水の江の浦島の子が

反歌

常世邊に住むべきものを劔太刀しが心から、おぞ
や此の君

喻族歌

久方の天の門開き、
皇祖の神の御代より

大伴家持

高千穂の岳に天降りし
梶弓を手握り持たし、

先立の御代より

隠さぬ

眞鹿兒矢を手挟み添へて、
先に立て、鞍取負ほせ、
踏みとほり國覓ぎしつゝ、
まつろはぬ人もやはし、
秋津洲大和の國の
宮柱太知り立て、

大久米のますら健男を
山川を岩根さくみて
ちはやぶる神をことむけ、
掃き淨め仕へまつりて
橿原の畝傍の宮に
天の下知しめしける

皇祖の天つ日繼と
隠さはぬ明き心を
仕へ來る祖の司と
生みの子の彌つぎくに
聞く人の鑑にせむを、
おほろかに心思ひて

繼ぎて來る君の御代御代、
すめらべに極めつくして、
こと立て、授け給へる
見る人の語りつぎでて
あたらしき淨き其の名ぞ、
虚言も祖の名斷つな、

大伴の氏と名に負へる ますらをの伴。

反歌
劔太刀いよとぐべし古ゆさやけく負ひて來にしそ
の名ぞ。

天平勝寶五年正月四日治部少輔石上

朝臣宅嗣の家に宴せしときの歌 道祖王

新しき年のはじめに思ふどちいむれて居れば嬉しく
もあるか。

山部 赤人

明日よりは若菜つまむと占めし野に昨日も今日も雪
は降りつゝ。

花を詠める

讀人 不知

この夕秋風吹きぬ白露に争ふ萩のあす咲かむ見む。

有間皇子自傷結松枝歌二首

家有者苟余威飯乎草枕攘余之有者推之菜

余威

いづもあれきもよもさういひをくらもろり
いづもあれきもよもさういひをくらもろり

大伴家持

雨ごもり心いぶせみ出でて見れば春日の山は色づき
にけり。

讀人 不知

遊覧自乃濱 松之枝守引
結 直二草一有者亦
還見武
三月のあはれ
七言五句
古手福を
に厚部行小

旅人の宿りせむ野に霜ふらばわが子羽含め天の鶴群
日並皇子尊の舍人慟傷みて詠める歌

東の瀧の御門にさもとへどきのふも今日も召すこと
もなし。

近江の湖夕浪千鳥汝が鳴けば心もしぬにいにしへ思
ほゆ。

青丹よし奈良の都は咲く花のにほふがごとくいまさ
かりなり。

寧樂の京の荒墟を傷みて作める歌
世の中を常なきものと今ぞ知るならの都のうつろふ

三河
阿奈明補志感動詞
三河
感動詞
秋言葉
ほめて用ふ
秋言葉

輕白ま女は

輕皇子
天武天皇の孫
草壁皇子の子
安騎野
大和國宇陀郡

佐保川
奈良の都の東か
ら北へまはつて
南へ流れる川

見れば

輕皇子安騎野に宿し給ふ時よめる歌 柿本人麿
東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月傾
きぬ。

大唐に在る時本郷を憶ひてよめる歌 山上憶良
いざ子とも早く大和へ大伴の御津の濱松待ち戀ひぬ
らむ。

山背にてよめる 讀人不知
宇治川を舟渡せをと呼ばへども聞えざるらし梶の音
もせぬ。

思ほえず來ませし君を佐保川のかはづ聞かせずかへ
按作益人

しつるかも。

山部 赤人

ぬばたまの夜のふけゆけば、楸おふる清き川原に千鳥

しばなく。

元興寺の僧

自ら嘆く歌

白珠は人に知らえず、知らずともよし、知らずとも、吾し

知れらば知らずともよし。(萬葉集)

七 歌の調子

島木 赤彦

短歌に於ける表現は、單に歌の言語の持つ意味のみで足れりとする事は出来ません。その表現しようとする感動の調子が、

島木赤彦
本名久保田俊彦
歌人
明治九年長野縣
上諏訪町生

歌の各言語の響やそれらの響をつらねた全體の節奏の上に現れて、始めて歌の生命が生れるのであります。歌の言語の響節奏、これを歌の調子若しくは聲調、格調等と謂ひます。

我々の感動は、伸びくと働く場合、ゆるくと働く場合、切迫して働く場合、沈潜して働く場合といふやうに、個々の感動に皆特殊の調子があります。その調子が、宛らに歌の言語の響や全體の節奏に現れて、始めて表現上の要求が充されるのであります。この調子の現れは、意味の現れと相軒軽するところないほど、短歌表現上の重要な要求になるのであります。古來よりの秀作は、皆、歌の調子が作者感動の調子と快適に合つてゐるために、永久の生命を持つてゐるのであります。例へば、柿本人麿歌集中にあるといふ

弓月が嶽
大和國磯城郡羅
向村にある山

あしびきの山川の瀬の鳴るなべに弓月が嶽に雲立ちわたる。(萬葉集卷七)

の歌について言ひましても、山川の瀬の鳴るなべに」と一氣に進んで第四句を呼び起すところに、多く生動の趣があるのでありまして、この「なべに」といふ濁音を含んだ第三句が、第四句二個の濁音と相待つて山川の景情を生動させてゐる勢は、これを他の如何なる句法を以てしても言ひ換へることの出来ないものでありませう。これは勿論「なべに」の持つ意味より来る力もあるのでありますが、響から来る力と、その響の全體の節奏に及す影響とが大きいのであります。殊に、第一二句「互仁波」の「疊用」を受けて、「鳴るなべに」と押し進んでゆく勢を想ふべきであります。第四五句は、これに對して更に非常の力を以て据つてゐるので

ありまして、金剛力を以て前句を受け且結んでゐるといふ概があります。この力も主として調子の上に現れてゐるのであります。第五句二五音が、主として力の中心となつて居ります。試みに、第五句を「雲ぞ立つなる」「白雲立つも」などの三四音四三音としたら、どうでありませう。歌の力がめちやくに碎けて了ふてありませう。歌の生命が内容や材料よりは、調子にあることが分ります。この歌、實に、山河自然の景物に對して、作者の心中に動いた寂寥感が徹底して歌の調子に現れてゐるのであります。斯様な歌によつて歌の調子を會得することはためになることでもあります。

み吉野の象山のまの木ぬれには、こゝだもさわぐ鳥の
聲かも。(萬葉集卷六)

これは山部赤人の歌であります。「山のまは、山の際、木ぬれ」は、木の末「こゝだ」は「許多」の意であります。この歌、山河自然の風物に對してゐる境地が、前の人麿の「足曳の山川の瀬の」の歌によく肖てゐるのみならず、み吉野のきさ山の際の」と互仁波の」を疊用して初句をおこしてゐる手法までも、よく肖て居るのであります。第三句以下にいたつて、全く前者と異なる感動をあらはして居ります。これは前の人麿の歌の第四句に至つて突然山の名を提示し來つた勢に比して、み吉野のきさ山のまの木ぬれには」と呼びかけた句法が、直ちに第四句以下と相聯つて、一首を直線的に押し進めてゐるからであります。こゝだも騒ぐ鳥の聲かも「四三音三四音の諧調が、人麿の「弓月が嶽に雲立ちわたる」の七音二五音の諧調と、自ら別趣の勢をなして居ります。人麿のあ

の歌は、人麿の雄渾な性格に徹して、おのづから人生の寂寥所に入つて居ります。赤人のこの歌は、赤人の沈潜した靜肅な性格に徹して同じく人生の寂寥所に入つて居ります。入つてゐる所は同じであつても、感動の相は、個性の異なるがまゝにちがつてゐるのであります。それが自然に歌の調子に現れるのであります。人麿の歌は、數歩を過れば騒がしくなませう。赤人の歌は、數歩を過れば平板になりませう。これは皆兩者の歌の調子から來てゐる相違であります。猶この赤人の歌で、上相違から來てゐること勿論であります。猶この赤人の歌で、上句を受ける第四五句に重々しい響きを持つた詞の多いといふことが、讀者の感動を異常な所へ誘つて行く力になつてゐることに注意すべきであらうと思ひます。

春すぎて夏きたるらし、白妙のころもほしたり、天の香

具山。 (萬葉集卷二)

持統天皇の御歌として知られて居ります。第二句と第四句で切れてゐるために、調子が落ち着いて、初夏の心持が現れて居ります。第五句の名詞止めも、この場合よくすわつて、動かさない重みを持つて居ります。秀作であると思ひます。歌の命は、大抵第五句で定まります。第五句だけでは無論定まりませんが、少なくとも第五句の調子が輕ければ、歌全體を輕くしてしまふやうであります。これは、前に挙げた例について見ても分ります。萬葉集には、字餘りの句が多いのでありますが、それは、大抵第五句にあるやうであります。それも第五句の調子を重くしたいといふ自然の要求から來てゐるのであらうと思ひます。

夏實の川
吉野川の上流

湯原王
天智天皇の皇孫
施基皇子の子
光仁天皇の皇弟

吉野なる夏實の川の川淀に鴨ぞ鳴くなる、山かげにし
て。 (萬葉集卷三)

湯原王の御歌であります。第一句からすらくと連続した句法を第四句で一旦踏み切つてゐるために、緊りと勢が生じ、更に「山かげにして」といふ生動の句を、据ゑて、この句一首全體に反響するほどの力になつて居ります。感嘆に値する作であります。

大海の磯もとゝろに寄する波、割れて、碎けて、裂けて、散
るかも。 (金槐集)

波の鞆鞆と寄せかへす景情に對して、割れてといひ、碎けてと重

ね、裂けてと疊んで、その重疊の勢を「かも」といふ強い響で結んだ力を想ひ見るべきであります。一本、第三句、よる波の」とありますが、これは、必ず「よする波」と一旦踏み切らねば歌の勢を成さぬのであります。波の姿と、感動の姿と、そしてそれを現した歌の姿と、如何によく一致して居るかを知らることが出来ませう。以上諸例によつて、少しく歌の調子を説きました。が、心の相が人に異なり、一人の心も様々に動くのでありますから、その動きの状が、如何にして歌の調子に現れるかといふことは、到底説き盡せる筈がありません。只、それが如何なる心の動きであらうとも、調子の上に緊張して現れて居らねばならぬことは、どの歌にも通じて言ひ得る所であります。柔きものは柔きに緊張して居り、強きものは強きに緊張して居り、暢やかなるは暢やかな

るに緊張して居らねばなりません。而してその緊張の快適に現れてゐるのが萬葉集であります。左様な歌の調子を我々は萬葉調と唱へてゐるのであります。緊張の調子が緊張の主観から生れることは贅言に及びません。(歌道小見)

八 惟喬親王

昔惟喬の親王と申すみこおはしましけり。山崎のあなたに水無瀬といふ所に宮ありけり。年ごとの櫻の花盛には、その宮へなむおはしましける。その時右の馬の頭なりける人を、常に率ておはしましけり。時世経て久しくなりにければ、その人の名（注）わすれにけり。狩は懇にもせて、酒をのみ飲みつゝ、（和歌）やまと歌に

惟喬親王 文徳天皇の第一皇子とも稱す 小野宮とも稱す 母は紀名虎の女 静子は長子 天歌に皇太子の外 天思は皇太子の外 或藤原良房への 御遠慮で果され 五三二(一) 御出家

寛平九年（一五
五七）薨
年五十四

山城國乙訓郡大
山崎村山崎
水無瀬
攝津國三島郡島
本村廣瀬山城の
右の馬の頭
在原業平貞觀年
中右馬頭になる
後右近衛中將元
慶五年（一五
四一）卒
年四十六

かゝれりけり。今狩する交野の渚の家、その院の櫻、殊におもしろし。その木のもとにおり居て、枝を折りて、かざしにさして、上中下みな歌よみけり。馬の頭なりける人のよめる。

世の中に絶えて櫻のなかりせば、

春のこゝろはのどけからまし。

となむよみたりける。また人の歌、

ちればこそいと櫻はめでたけれ、

うき世になにか久しかるべき。

とて、その木の下は立ちて歸るに、日暮になりぬ。御供なる人、酒を持たせて野より出で來たり。この酒を飲みてむとて、よき處を求め行くに、天の川といふ所に至りぬ。親王に馬の頭大御酒まゐる。親王のたまひける、交野を狩りて、天の川のほとりに

交野
河内國北河内郡
枚方町附近一帯
の稱

渚
河内國北河内郡
牧野村

天の川
河内國北河内郡
牧野村にある
たなはたつめ
織女

紀の有常
紀名虎の子
雅樂頭
刑部卿
貞觀十九年
（一五三七）卒

至るを題にて、歌よみて盃させ。との給ひければ、かの馬の頭よみて奉りける。

かりくらしたなばたつめに宿からむ、

天の河原にわれは來にけり。

と聞えければ、この歌を親王かへす。誦し給ひて、返しえし給

はず。紀の有常御供につかう奉れり、それが返し、

ひとゝせにひとたび來ます君までば、

やどかす人もあらじとぞおもふ。

歸りて宮に入らせ給ひぬ。夜更くるまで酒飲み物語して、あるじの親王酔ひて入り給ひなむとす。十一日の月も隠れなむとすれば、かの馬の頭のよめる。

あかなくにまだきも月の隠るゝか、

山の端にげて入れずもあらなむ。

親王に代り奉りて、紀の有常、

おしなべて峯もたひらになりななむ、

山の端なくば月もかくれじ。

むかし水無瀬に通ひ給ひし惟喬の親王、例の狩しにおはします。供に馬の頭なる翁仕う奉れり。日頃經て宮に歸り給うけり。御おくりして疾くいなむと思ふに、大御酒給ひ、祿給はむとて遣はさざりけり。この馬の頭心もとながりて、

枕とて草ひきむすぶことも、せじ、

あきの夜とだにたのまれなくに。

とよみける。時はやよひのつごもりなりけり。親王大殿ごも

小野
山城國愛宕郡小野郷
今の八瀬大原邊一帯の名

らで明かし給ひてけり。かくしつゝ、まうで仕う奉りけるを、思の外に御ぐしおろさせ給ひてけり。む月に拜み奉らむとて、小野に詣でたるに、比叡の山の麓なれば、雪いと高し。強ひて御室に詣でて拜み奉るに、つれづれといと物悲しくておはしましければ、やゝ久しく侍ひて、古の事など思ひ出でて聞えさせけり。さても侍ひてしがなと思へど、公事どもありければ、え侍はで、夕暮に歸るとて、

わすれては夢かとぞおもふ、おもひきや、

雪ふみわけて君を見むとは。

とてなむなくく、來にける。(伊勢物語)

藤岡作太郎

國文學者
文學博士
東京帝國大學助
教授
明治四十三年癸
卯年四十一

九 文學と宗教

藤岡作太郎

遊子學んで二十餘年、たゞ惑に溺れ、
既に現在に飽いてまた當來を懼れ、
疑惧煩悶衣食も安からず、
ひとり一個の笠に苦みの頭を包みて、
千年年毎に新なる舊都の春にさまよへば、
柳綠花紅更にわが胸を痛ましむるかな。
比叡の麓にわたれる霞は、近く春風に匂ひ、
愛宕の嶺を越せる雲雀は、俄に脚下に墜つ。
指さす方に繪と見ゆる祇園清水三の峯、
塔影小さきところ、色ほのかなる男山

麥隴菜畝歴史の印を残さざるはなく、
無常迅速いづれも涙の跡なるよ。

法成寺
藤原道長の建て
た寺
隱僧
兼好法師

安養淨土の法成寺もあはれこの淺茅原と、
雙が岡の隱僧が昔語りも夢なりや、
木幡の外山松柏空しく薪と摧かれぬ。
二十年の榮華は沙羅雙樹の花の色、
六波羅殿はたゞ洛東に名を留むれども、
慘憺たる經營蜻蛉の命と共に何か残れる。

國破有山川
城春草木深

リニホトキキリ

芥子園画傳 見城の

金城鐵壁の迹、桃の花うつろひて、
春草萌ゆる處たま／＼瓦片ぞ散りほひたる。

伏見・桃山・幽鳥の轉るに任せて、
四海併呑の雄圖も淀の水泡と消えたりや、
あゝ英雄の事業大は即ち大なれど、
時^時の前にはたゞ風前の燈火。

生には意味なき死の神と云ふ

(目録に「名」を記す)
南無法華經

悲しきかな、生滅の鬼は日にくく人を餌として、
惠も罪も愛も望も旭の霜と解け去りぬ。
英傑の遺業消ゆるは卒都婆の文字より早ければ、
爲すなき一生、あなはかなしや。
秋風吹けば、梢の木の葉ちりくりに、
互に急ぎ相追ひて、もとの土にぞ歸るなる。

由聖廟
方墳
卒都婆
高野

生の上にまうて
上惠・罪・愛
望・望
望望のあつ
そゆで死んば
旭の朝
由聖のまうけ
まよ

Stn pa

恐^{おそ}動^{うご}河^がを^をく^く多^た河^がの^の死^しの^の神^{かみ}
なり。

浮舟物語

消ゆる待つ間の露とこの身を思へば、
はかないの身を思へば

恐は刻々にわが肉を削り去り、
すわる茵はうき雲の絶えずぞ揺るよ。
いづこか驕傲なる時^時のかひなさを嗤ひ、
永劫の片はしをわが隠れ家として、
不變の叫^叫に慰樂の聲を求むべきか。
此の叫は「あやう」の音に似る

(宇治丁跡)

宇治の浮舟流るゝ跡の消ゆるごと、
はかなく過ぎし五十餘帖の物語、
やさしき筆をたどりにし主は淑女の名のみにして、
若紫の色はあせ、匂は残る九百年、
緋く人はあやしく墨の香に酔ひて、
いづこか驕傲のうきはつたにあや

わが身をもうき世の事をも忘るなる。

わが世を捨て、文學の野に分け入れれば、

樹々も千草も花咲亂れ、實なりこぼれ、

くしき女神の眞玉なす手に招くなる。

時もや過ぐる、世もや歴る、常なき事の忘らるゝ。

蓬萊瀛洲もたゞ詩人の想より、

人こそ朽つれ、筆の命毛永くこそ。

筆毛、半運州の所

補陀落や岸うつ波とくりかへす、

東寺の禮讚振鈴聲すみてそゞろ涙ぞ進むなる。

幾千人か祈るなる遍照金剛の聲々の、

弘法大師の

意味を強ゆる言

補陀落や

補陀落や岸打つ波は三熊野の那智の御山にひびく瀧津瀨(那智觀音御詠歌)

一息づつに大師の御姿現るゝ、

この世の限なり出でん人の心に刻まるゝ、

尊き碑、時の嵐もいかにせん。

心にさすまれば、たゞ、極む時、も、風も、怒る、す、も、を、事、也、い、

英傑は我のみ立て、世人を土埃と散らし、

大聖は我を空しうして世人の爲に棄つ、

英傑死すれば世人は背き去つて顧みず、

大聖世を去れども世人は幾度もまた大聖たり、

生死流轉はわが前に雲煙よりも淡く、

眞如實相の月ぞ常しへに明かなる。

月の光は沙ごころまじりまじりて、心相のまじり、何處も同じく、

宗教は秋山の下水壯夫、文學は春山の霞壯夫。

真なりと皇皇たり
如り如り

これは櫻花の散りては年々に色鮮かに、
 かれは常磐の松の千歳も數ならず、
 濁れるを清くし、疑へるを信ぜしめ、
 うたかたの世より無限の仙境に誘ふ、
 あはれはらからこの同胞よ。(東圃遺稿)

10 土牢御書

日蓮

日蓮は明日佐渡の國へまかるなり。今夜の寒きにつけても、牢の中の有様思ひやられて痛はしくこそ候へ。あはれ殿は法華經一部を、色心二法共に遊ばしたる御身なれば、父母六親一切衆生をも助け給ふべき御身なり。法華經を餘人の讀み候は口ば

土牢御書
 文永八年(三三)鎌倉の土牢にある日蓮のおくつた日蓮の書狀
 日蓮宗の開祖
 安房國長狭郡(今安房郡)小湊村實名左衛門重忠の子
 清澄山比叡山等で修行

色
 知覺の用ちきも
 形復つ目もへまも
 知覺の用ちきも

かり言ばかりは讀めども心は讀まず、心は讀めども身に讀まず、
 色心二法共に遊ばされたるこそ貴く候へ。諸天童子以爲給使
 刀杖不加毒不能害と説かれて候へば別の事はあるべからず。
 牢をばし出でさせ給ひ候はどとくく來り給へ。見奉り、見え
 奉らん。恐々謹言。(高祖遺文録)

11 石つぶて

坪内逍遙

わあ〜といふ喧騒の聲。そのがや〜のまだ全く鎮まり切らぬう
 ちに幕が明く。蓮華寺の本堂の心。
 正面の高座には日蓮上人四十三歳鼠色の衣、木蘭色の五條の袈裟、手首
 に數珠を掛け、目を瞑り、端然として坐してゐる。高座の下、左右には蓮

建長五年(一二三三)清澄山で法華宗を唱ふ
 文應元年(二二〇〇)立正安國論を幕府に上つて伊東に流される
 文永八年(二二三三)龍口で斬られんとして助かり佐渡に流された十一歳赦されて歸り甲州身延山を開く
 弘安五年(二二二二)武藏で歿
 年六十一
 坪内逍遙
 名は雄藏
 英文學者
 戯曲家
 早稻田大學名譽教授
 文藝博士
 安政六年(三三三九)英國國賀茂郡太田村尾張代官所

精神初もむかひ
 的も
 色
 谷田分
 色里リマ
 世色界
 色
 色
 色

大正九、三月
 法難
 行

宣業日本社
 八、年明治、屋、子、閑、漢

蓮華寺

安房國長狭郡

(今は安房郡)四

條地花房にある

眞言宗の寺

時は文永元年

(八四)十月十七

日

上手

舞臺に向つて右

手

かぶりつき

舞臺ぎはの土間

白妙

天津城主工藤左

近丞吉隆の室で

日蓮の篤信者

刈藻

白妙の侍女

東條

地頭東條左衛門

尉景信

北浦忠内

白妙の家人

華寺其の他、上人に好意を有する寺々の僧侶及びそれらの主な檀徒ら
しき身分よき在家が居流れてゐる。

高座の前の上手、かぶり付きの附近及び其の下手には多勢の聴衆僧俗、
貴賤各職業男女老若ごちやませではあるが、概して上手にゐる者は歸
依者らしく、下手にゐるは多少の反感を抱いてゐる者らしい。が、今は
何事か争論が始つたらしく、雙方が入り亂れ、只少數を除くの外は、何れ
も立ちかゝり口々に何事かの、しりわめき、中には肩腕を怒らして太
刀に手を掛けてゐる者もある、立ち上らず居る者の中に、白妙、刈藻其の
他の女性と若干の老人連や僧形の男女がある。

やゝ下手に突立つて、高座の方へ向いて、口を尖らせ、目を瞋らしてゐる
のは念佛僧の呑空と隨信であり、其の後ろに肩を怒らして並び立つて、
援聲を與へてゐるのは東條の家人であり、それを制止しつゝ、立身で何
事か言つてゐるのは日蓮上人の弟子僧の乗觀坊と長英坊である。又
上手に突立ち、白妙に制せられてゐるのは北浦忠内であり、中央に突立

鏡忍坊

小松原の法難に

命を捐つたもの

彌八郎

東條景信の甥

乗觀

いや、どんな御異議であらうと、御異議であらうと、阿闍梨は

喜んで聴かれます。無論答辯もせられます。只さう騒が

しくおつししやつては、聴衆たちの迷惑になります。どう

か静かにお一人づつおつしやるやうに願ひたい。

呑空

よろしい。では、先づわしが問ふことにしよう。

つて罵り騒ぐ日蓮派の信者らを制止してゐるのは鏡忍坊である。尚
上手にも下手にも、反日蓮組らしい聴衆が立ちまじつて喧騒してゐる
のだが、彌八郎主従の姿だけは見えてゐない。
幕が開くと乗觀坊、長英坊、鏡忍坊らの「まあ、静かになさい」「お立ちな
すつては外の人々の迷惑になります。まあ、静まりなさい」「どなた
にもお席にお着きなさい。お静かになさい」と静止する聲々の中
に、めい／＼次第に見物席を背にして、座に着く。念佛僧二人と乗觀、長
英だけは尙立つてゐる。

乗觀 いや、どんな御異議であらうと、御異議であらうと、阿闍梨は
喜んで聴かれます。無論答辯もせられます。只さう騒が
しくおつししやつては、聴衆たちの迷惑になります。どう
か静かにお一人づつおつしやるやうに願ひたい。
呑空 よろしい。では、先づわしが問ふことにしよう。

法然 名は源空 淨土宗の開祖 美作久米南條生 延暦二年(七七〇) 寂 年八十 眞宗七祖の第七祖

曇鸞 支那の北魏の高僧 始め四論宗を學び後淨土教に歸した 眞宗七祖の第三祖

四論 中論 百論 十二門論 大智度論

道綽 支那の唐の高僧 曇鸞の碑をよんで大に感じ念佛に歸したるもの

と隨信へ心得させる。これにて隨信は下にゐる。乘觀長英は高座の脇、よき處へ戻つて住ふ。一座しんとなる。と吞空は形を正して、

吞空では改めて、日蓮御坊にお尋ねしまするぞ。御坊は只今、口を極めて、我が念佛宗を讒謗しめされたのみならず、宗祖法然上人をば、末代の愚人の爲に墮地獄の法門を開いた邪智の不正師だと惡口し、近年、都鄙に、災厄並び起つて、下萬民が惱むのは、ひとへにそれが爲だ、すなはち念佛は無間地獄の業因、法華經は成佛得脱の直路だといはれたが、そんな證文が何處にござる。勿體なくも、忝なくも、我が念佛の法門といつば、其の由つて來る所最も遠く、最も尊く、既に彼の曇鸞法師は、ひとへに之が爲に四論の御講説を抛ちめされた。また彼の道綽禪師は、之が爲に涅槃の廣業をば捨てさせら

ネハレ
ニハレ
ハシ

眞宗七祖の第四祖 涅槃 梵語 滅度又は死 滅と譯す 佛のさとりに

善導 隋から唐へかけての高僧 道綽の淨土の觀經を講ずるのを聞いて念佛に歸した 眞宗七祖の第五祖

慧心 名は源信 天台宗の高僧 往心要集の著者 横川の慧心院に居た 寛仁元年(一〇七二) 寂 年七十六 眞宗七祖の第六祖

れた。善導和尚も之を專修なされ、慧心僧都も専ら一行を宗としめされた。就中、勢至菩薩の化身とまで崇め奉る宗祖法然上人に於かせられては、徳は諸の先師に越え、智は日月に等しくあらせられた。其の上人が、遍く觀、悉く鑑み、深く思ひ、遠く慮らせられた末に、遂に諸經を抛つて專修遊ばされた我が宗門に假にも卯の毛ほどの瑕疵があつて成るものかい？然るに我が念佛の故に、天變地妖が起るなどとは、前代未聞言語道斷の惡口だ。無間地獄に墮すべき罪人とは御坊のことだ！さ、念佛宗が何故邪法だ？さ其の謂れを承らう、見ん事其の證據を舉げて見なさい。

日蓮 (しづかに目を開きはじめはおだやかに、しかし段々語勢を強めつゝ) 夢を食ふ者は辛きを思はず、魚を商ふ者は腥きを忘る。一たび

法華涅槃

勢至 阿彌陀佛の脇士
智慧の大勢一切
に至るが故の名
五時 釋迦一代の教法
を五つの時代に
區別した稱
華嚴阿含方等般
若は方便即ち權
で法華が實であ
るといふ
四十餘年 法華經の序經た
る無量義經に出
てゐる語

邪教に惑溺したりといふと、たま／＼正しき師の教を聽いて却て之を異端と罵る。あゝ、迷と罪と、二つながら深いのに氣がつかんとは、氣の毒なことぢや。…先刻、辯じかけた通り、世尊の御說法は一代五時、いづれも世尊の御説教には相違ないが、其の間に、おのづから、大小權實前後深淺勝劣難易の別がある。而うして法華經が無上無比の御説教であることは、十方佛土の中唯一乘の法のみあり、無二亦無三」と仰せ置かれたに明白ぢや。また、四十餘年未顯眞實」とも正直に方便を捨て、但無上道を説くぞ」とも仰せられた。法華經が一代五時の肝腎たること昭々として火を觀るが如しぢや。然るに曇鸞道綽善導らは權に就いて實を忘れ、只佛教の淺瀨のみを渡つて、其の深き淵に遡ることを怠つた。

法然坊の如きは、最も其の易きを貪つて、難きを避け、剩へたまたま難きに就かうとする殊勝な者共の有らうとする場合に、私曲の言説を述べ、劣れる教を揚げ、勝れる教を抑へ、大乘經、六百三十七部、二千八百八十三卷、並に一切の諸佛諸菩薩及び諸の世天等を「捨」「閉」「閣」「抛」の四文字を置いて、ほしいまゝに遮斷し、以て一切衆生の心を惑亂し、就中若し人此の徳を信ぜずして毀謗せんには、



(藏館物刊室帝京東) 題

一切世間の佛種無地に斷滅せん。乃至其の人命終つて阿鼻地獄に入らん」とまで仰せられた其の大切な法華經を蔑ろにし、敢へて顧みざるに至つては、是全く世尊の御本懷に違背し奉る振舞ぢや。妄語の至、言語道斷とは此の事ぢや。佛道の謀叛人ぢや!!

と念佛僧を始め、反日運組がやくと騒ぎかける。
長英乘觀鏡忍ら漸くそれを制止する。日蓮はすぐ語を繼ぎ、

然るに、凡そ世間普通の善悪は、當面眼前の黑白と同様に、愚者も女わらべも、あらまし之を辨へ得る。なれども、目に見えん教法の正邪善悪、其の導師たる者の聖凡曲直に至つては、證り切つた阿羅漢さへも容易くば見分けかねる習ひぢやによつて、上下貴賤賢愚老弱舉つて法然が妄語を信じ、淨

淨土の三經
無量壽經
觀無量壽經
阿彌陀經

土の三經のみを崇めて他の諸經を抛ち、只彼の阿彌陀佛ばかりを仰ぐことを知つて、他に諸の尊い佛たちの在しますことを忘れ奉るに至つた。すなはち念佛宗は……

呑空 (こらへかねて突立ち上つて) ままお待ちなさい……

日蓮 (かまはず) 取りも直さず、諸佛諸經の怨敵……

呑空 まま!……

日蓮 …… 聖凡賢愚、一切人間の怨敵ではないか! かるが故に、今世にはびこる邪宗門多しと雖も、先づ第一に罪すべきは…… 御ま、ま、ま、ま! お待ちなさい、いゝや、先づお待ちなさい。…… 御坊の只今の言説こそ、却て明かに大世尊の眞實意には遠いわい! 世尊は常に、あらゆる衆生の機に隨順して、隨宜の教法を説かせられた。衆生の機根調熟のためには屢、御方便

をお用ひあつた。抑末法の今日は罪障殊の外重うして人只其の境に細やかにして心は鹿く、識は揚り、神は飛ぶ。逆もく、靜かに觀らしむることなどは叶はざるによつて、法然上人、それを憫然におぼしめされ、他力本願の易行門を開いて、只一向專念に彌陀佛の御名を唱へよ、然らば必ず救はるべきぞ、と大慈悲の御教をな垂れさせられた。すなはち念佛往生の本願は、有智無智持戒破戒多聞小見を簡ばず、在家出家を問はず、一切有心のものは皆がら容易く唱へ得るが故に、譬へば、天の一月の萬水に浮んで、水の淺深を嫌ふことなきが如く、また太陽の世界を照して、地の高低を擇ばざるが如く然り。かやうにあつてこそ世尊の本懐に叶ふといふものだ。是れぞ所謂大慈大悲の御方便だ。然るに

閻浮提
Jambu-dvīpa
梵語
須彌山の南
方の諸國
轉じてこの
世界

何ぞや、我が宗祖上人を惡口し奉つて、佛道の謀叛人だなんぞとは、實に以て、無禮千萬、言語道斷……

日蓮 暫く。ま、お待ちなさい。……其の方便論から先づ大きな間違ひでござるぞ。苟も隨宜說法の世尊の眞實意を心得てると申さる口の下から、我が日本國を印度や震旦と同等の劣機の國土と見らるゝは、何といふ非事ぢや？一閻浮提の間、萬を以て算ふる國土のうち、又と比類のない我が日本國には、方便無用、外道は無用、小乗は無用ぢや。只一向に、まつしぐらに、大乘純圓の眞實教こそ宣べ廣め、布き行ふべきぢや。其の大乘とても、法華經以外に何があらうぞ？然るに法然坊は、眞實に堪へ得る我が國民に、生才覺の虚偽を授け、即身即佛の直路の行法を、却て雜行ぢや、千中無一の險道

即身即佛

即身成佛と同じ
成佛とは本来具
有の佛性を開發
し無上の悟を開
いて佛となるこ
と

日蓮の教では南
無妙法華經を
稱へるとその秘
密の力によつて
此の佛性が開顯
せられて成佛す
るといふ

一機

同一種の教を受
くべき動機

一緣

同一種の因緣

選擇集

二卷

法然上人の著
念佛が往生の本
たることを述べ
たもの

隨信

ぢやなぞと難癖を付け、世の臆病なる徒輩をして徒らに世
を厭ひ苦を避けうとする卑屈の根性をのみ長ぜしめた。
こゝに於てか、淺ましいかな、世を擧つて一機一緣の小事を
事とし、ひたすら後世の安樂をのみ願ふのあまり、勇猛の氣
は日に薄れ、身の安穩ばかりを第一にして、或は主を忘れ、或
は親を忘れ、或は家を忘れ、或は國をさへ忘るゝに至るもの
が、漸く上中下に瀰漫するのぢや、畢竟これ誰の罪ぢや？
さかしら立てして愚者を欺く法然坊があつた「選擇集」の故て
はないか？……

と此の以前から隨信は屢、居丈高になつたり中腰になつたりして、何か言ひ
たげにしてゐたが、此の時こらへかねて突立ち、

いや〜！いや〜！いや〜！いや〜！さういふ御坊

こそ愚者を欺くのだ。口がしこう申されるが、さういふ御
坊こそ自身で本尊と崇めてをられる其の法華經の罪人だ
といふことにお氣がつかれんか？法華經に何とござる？
「末法の中に於て此の經を説かんと思はゞ、決して他人及び
他の經典の過を説くことなかれ。また諸の他の法師ら
を輕しめ慢ることなかれ。他人の好惡長短を説くことなか
れ」とあるではござらんか？さ、これでも御坊は法華經の行
者でござるか。

反日蓮黨俄かに色めき立ち、騒ぎかける。鏡忍長英ら制することある。

日蓮 はて、おろかなことをいふ御坊ぢや。お前さんは法華經の
第四を讀んだことがないのか？「若し惡人あつて、佛の御前
にて佛を罵り辱めんか。其の罪は尙輕し。若し人只一言

劫

Kalpa

梵語
長時と譯す
非常に長き
時間

攝受

攝取に同じ
佛の慈悲の手に
衆生をさめ受
けて育て護るこ
と

折伏

攝受の反對
惡人惡法を破り
くじくこと

たりとも法華經を讀誦するものを罵らんには、其の罪きはめて重し」とかうある。即ち末代に法華經を弘めようとする者を罵詈するものは、世尊に一劫が間怨せん者の罪にも百千萬億倍ぢやぞ」と説きおかせられた。お前さんは、頭を圓めてをるから、多分佛徒であらうに、修行に、攝受と折伏との別のあることを知らんか？……いや、ま、聴きなさい……今は如何なる時ぢや？今日は果して攝受の時機か？只今も論じた如く、邪宗異端世にはびこつて、而も人皆が其の正邪、曲直を分ちかねてをる今日は、何事をさしおいても、先づ邪宗の邪宗たる所以を説破して責め罵り、摧き滅さねばならん時ぢや。かるが故に……

呑空
いや、ま、お待ちなさい！さほど我が宗を惡口讒謗する御坊

二天

摩醯首羅天
毗紐天

三仙

迦毘羅
優樓迦
勒沙婆

が、何故我が宗祖上人の御先蹤を冒しめされた。いやなぜ我が宗祖の智慧を盗んだ？南無妙法蓮華經と唱へさするのは、我が宗の南無阿彌陀佛の稱名をそのまゝ、題目に代へたおぬしの小才覺に過ぎんではないか？

反日蓮黨又色めきいろく棄てせりふにて應援する。

日蓮
小才覺とは何ぢや？念佛を法然が先蹤とは何を馬鹿な！元來稱名は二天三仙の名を呼ぶにはじまつたことぢや。世尊始めて佛の御名を念ずることを以て之に代へしめたまうた。なれども、畢竟するに、念佛は假教の方便にして、唱題こそは世尊が實教の大眼目ぢや。念佛を石瓦に喩へるならば、唱題は金銀如意寶珠ぢや！そもく妙法蓮華經とは、上は梵王帝釋、文殊、彌勒ありとある諸の御佛の佛性と下

十界圓具

十界とは地獄・餓鬼・畜・阿修羅・人・天・聲聞・緣覺・菩薩・佛の境界を云ひ、圓融の妙理よりは此の十界の一々が互に他の九界を具するを十界圓具といふ
一念三千
吾人の一念の心の中に三千の法界を具備すること

は我等一切衆生の佛性とが一體不二にして、人法一如、十界圓具、一念三千の妙理悉くこゝに備はることわりを如實に簡明に表はし盡したる經名なるが故に、一度妙法蓮華經と唱ふる時んば、一切の佛、一切の法、一切の神祇、修羅人、天、餓鬼、畜生、乃至一切衆生の佛性を只一音にて喚び顯はす。其の功德無量無邊ぢや！彼の極樂の一佛に憐を乞ふ念佛三昧なぞとは天地の相違ぢや！ さ、これでも異議がござるか？

とこれにて吞空言葉つまり顔色火のやうになつて口ばかりもぐつかせる。隨信たまたま突立ち上つて、

隨信
いや、それはともかくも、他宗をさんぐに悪口して傍若無人の雜言を申さるゝのみならず、我から己れの事

上行菩薩

釋迦か法華經の宣傳を附屬せられた菩薩

大論

大智度論百卷 龍樹菩薩著

諸の無智の人

法華經勸持品十三に有る諸無智人、惡口罵詈等、及加三刀杖一者、我等皆當忍。

を正しい導師だの、上行菩薩の化身だのと僭越千萬な自負自讚を吐き散らしめさるのは、どうしたこととござる？ 取りも直さず「大論」に所謂非大人の振舞、讒賊の振舞ぢやござらんか？ 第一、御坊が正しい導師だといふ證據が何處に在る？ 上行菩薩の化身だなんぞといふ證據が何處に在る？

反日蓮黨が又一齊に競ひ立つて「さ何處にある！」と、それを言へ、それを吐せ！「賣僧め！」「讒賊め！」などと口々に罵り騒ぐ。鏡忍らが制すると漸く鎮まる。と上人は昂然として、今迄罵り騒いでゐた者をきつと指さし、

日蓮まつその如く、お前たちが競ひ立つて、吾らを口ぎたなく罵詈雑言するのが、取りも直さず、其の證據ぢや。「諸の無智の人あつて、正しき導師を罵り辱む」と仰せ遺された御本文がお前らの振舞そのまゝであるといふことに心附かんか？

と言ひもあへぬに、何處からともなく、石や瓦のかけらの碎片や古わらじなどがばらばらと高座に向て飛び来る。鏡忍ら早速身を以て上人を掩ふ。聴衆席色めき立つ。とりわけ背蟲の娘眼病者ゐざり申風病者など狼狽して逃げるので室内は大混雑である。

（上人は少しも動ぜず）「及び瓦礫を擲ち、杖刀を加ふるものあり。云々」と仰せられたに符節を合はす……（又石一つ上人の袂を掠める）お前らの此の振舞がその證據ぢや……

又五つ六つ石が飛んで来る。其の二つ三つが立惑ふ聴衆の老弱男女に中つてけたましく泣き叫ぶ。それを見て上人は居丈高になつて、

やい！日蓮を憎いと思ふならば、此の日蓮をこそ打て。罪無き者に怪我さすな。さずつと前へ進み出でて、予われを打て。……さ、打て。……

驚き騒ぐ聴衆が上下へ靡いたので、高座前には鏡忍、長英、乘觀の三僧だけ残

る。上人は高座を下つて三僧を左右へ退かせて、真中に突立ち、

なぜ打たんか？そちらから出て来んならば、こちらから進んで出る。さ、打て……（石つぶてが全く止んで、一座寂となると上人は聲を勵まして……）なぜ自負するか？なぜ自讚するか？といふのか？……「如來の現在にすら猶なほ怨嫉おんし多し、況や滅度の後をや」と記しおかせられた其の御誓言に、此の身がひつしと相當するのぢやと思ふ時は、自分こそは其の重任を果し奉るべき法華經の大行者であるぞと思ふ時は……嬉しいとも有りがたいとも、忝かたじけなくないとも、到底到底言舌ごんぜつに言ひ顯はすべきやうもないわい！（と更に感激の聲を高めて）なぜ自負するか？なぜ自讚するか？これが自讚せずにをられるか？自負せずにをられるか？さ、此の頸を鋸を以て挽切らば挽切れ！或

長卷
難刀のやうな太刀

五濁
劫濁
見濁
命濁
煩惱濁
衆生濁

は此の胸を長卷を以て眞二つに斬るならば斬れ。日蓮は此の舌の續くかぎりこの息の續くかぎり日本を救ふために、妙法蓮華經を説かいておかうか？…今や、五濁盛り熾つて、天變地妖並び起り、異端邪説國內に充滿す。剩へ、上下の者舉つて其の邪説異端に惑溺して、只一人其の非を覺る者もなく、其の非を正すものがないといふのは、何といふ淺ましいことぢや！嘗ては

法花經を以て若くは人空宗
 濁三千大千世界皆於佛及
 大菩薩摩訶薩亦復是人
 可及於此不如此受持
 法花經者乃是一日自得
 其福之富也



日蓮筆蹟(下總山中法華經寺藏)

つて、天變地妖並び起り、異端邪説國內に充滿す。剩へ、上下の者舉つて其の邪説異端

七難
 人民疾疫難
 他國侵逼難
 自界叛逆難
 星宿變怪難
 日月薄蝕難
 非時風雨難
 過時不雨難

孔丘が孝經を繙いた其の手が、今は其の肉親の父母の頭を打つわい。釋尊の妙經を讀誦するその口が、今現に其の眞實意を嘲り罵る。不幸の國とは此の日本の國ぢや！不信の國とは此の日本國ぢや！なればこそ昊天は目を瞋らし、て日本を睨み給ひ、大地も憤激して震動するのぢや！彼の承久の大不祥は、三天子を流し奉つたる大不祥は、蓋し之が爲に天の下したまうたる咎めであつたのぢやとは心附かぬか？「藥師經」に所謂七難のうち、五難は既に起つて、二難將に起らんとしてをる。中にも最も怖るべき他國侵逼難といふ大難が今方に目睫の間に逼つてをるのを知りをらんか？今が我が日本國の大事の瀬戸際ぢや。不惜身命の者輩出せざんば此の國は極めてあぶないぞよ！然るにそれ

を思はずして上は百官有司より、下は農工商の萬民に至るまで、擧つて邪教に誤られて、眼前當面の私慾にのみ眼昏んで、或は奢侈に耽り、或は遊惰に泥み、長へに迷妄の痴夢を貪る。就中今の世の坊主共は、自ら法師と名宣るからには、人を教へ、世を導かねばならん筈ぢやに、徒らに戲論妄語を事とし、世を欺き人を惑はす。今の世の坊主共は、何れも皆法師の名を盗む名盗人ぢや！法師の皮を着た畜生ぢや！

と言ひも終らぬ中に、ばら／＼と礫が飛ぶと同時に、下手からも縁下の土間からも東條の家人甲乙丙丁戊己らが彌八郎と共にあ／＼手ごろの棒ちぎりを振翳して一齊に上人めがけて襲ひかゝる。鏡忍長英、乗觀を始め北浦忠内らが躍り出でて之を遮り、忽ちごつちやの立廻りが始る。中にも鏡忍坊は最も目覺しく働き、只一人にて忽ち五六人を取りひしぐ。聽衆の僧俗男女はます／＼狼狽して、右往左往する。と

三宅雪嶺
名は雄二郎
哲學者
評論家
文學博士
萬延元年(1850)
加賀金澤藩生
大上有立德
左傳にある穆叔
の語

穆叔
春秋時代の魯の
大夫叔孫豹
(?-170)
稷
支那上代の帝舜
の子

史佚
堯の農師
周の武王の太史
尹佚
周任
周の大夫
藏文仲
魯の僖公の大夫

ど彌八郎は隙を見て、上人へ躍りかゝる。上人はきつとなつて之を睨む。彌八郎其の威に打たれたらしく、たぢ／＼となつて立ちすくむ。皆々之を見て、駭き感ずる思入、或は怪しみ怖るゝ思入よろしく活人畫模様にかまつて、幕(法難)

三 人生の快事

三宅雪嶺

「大上有立德。其次有立功。其次有立言。雖久不廢。此之謂不朽。」と曰へるは、穆叔以前より行はれたりし格言なるべく、穆叔以後數千年を経て變ぜず。註に、立德は黃帝堯舜、立功は禹稷、立言は史佚、周任、藏文仲とあり。他の例を擧ぐれば、孔子釋迦耶蘇の如きを立德とし、該撒奈破崙の如きを立功とし、ホーマー以下の文學者を立言とすべし。この三不朽を智仁勇の達徳に配當せ

帚木
園原や布施屋に
おふる帚木のあ
りとは見えてあ
はぬ君かな(坂
上是則)



三宅雪嶺

ば、立德は仁、立功は勇、而して立言は智なり。立功にも智を要し、立言にも勇を要すれど、主要なものを擧ぐれば各、特色あり。中に史的の意義ありて現代に認むるを難んずるは、立德なり。現に立功家及び立言家の少なからざるに、稱して立德家とすべきものを何處に見るか。立功及び立言は全く現實の事にして、過去にもあれば、現在にもあり、將來にもあるべく、立德の漠然たるが如くならず。今は立德の形跡あるものも、立功と立言との孰れかに屬すべきが如し。三不朽の中、立德は人の欲求する所の絶頂にして、聖たり佛たるは人生第一の快事なるかに考へらるけれど、帚木の如

文帝

三國の魏の曹丕
武帝曹操の子
(一八七—一八六)

筆は劍より

英國の詩人
リットン卿
の語

The Pen is mightier
than Sword.

司馬相如

漢の文人
紀元五百年代の
人

左思

晉の文人
紀元九百年代の
人

杜少陵

唐の詩人
名は甫
(一三六—一四三)

く之を求めて遂に見失ふに終らん。現代の人の志す所は立功ならざれば立言なり。

魏の文帝曰く、年壽有時而盡、榮樂止於其身。二者必至之常期、未若文章之無窮。是、文事に與る者の期せずして考へ及ぶ所にして、筆は劍より強し。といふも、其の旨相近し。ホーマーは傳明かならざれど、傳説に據れば、琴を携へて人の門前に立ち、且謠ひ且語れる者なりといふ。明を失ひしが上門附の如く、絃歌して、錢を乞ひし者ならば、苦痛なる生活を送りしなるべきに、後世之を歎美して已まず、彼の如くんば死すとも可なりとするもの多し。凡そ苦心慘憺の甚だしきこと、詩人の句を撰するが如きは少なし。司馬相如の子虚賦、左思の三都賦、辭を練るに全力を用ひき。杜少陵が爲人性僻耽佳句、語不驚人死不休。といへる、眞に

實狀なり。

幾多詩人中には強ち人を驚かさんとせず、或は之を喜ばしめんとし、或は之を悲しましめんとし、或は之を別乾坤に導かんとするもあるべけれど、要するに皆多少目的を達する所に愉快を感じ、洛陽の紙價を貴くせる時、誠に大勝利を得たる如く悦びたるならん。己の以て絶佳とする所、人全く解せず、外に出でて衆に笑はれ、内に入りて米鹽に窮する時、若し猶自ら信ずること篤くば、當世に屈して後世に伸ぶるあるを以て慰めたるべし。又實に當世に屈して後世に伸ぶるものあり。「人間知己少、破硯是良朋」といへるは、知己の少なくして愈、得意を感じざるなり。

賈誼、蘇軾の策論は正しく立言なり。世に論文と稱するは皆然り。論文といふも全篇悉く議論より成るとは限らず、或は議論

人間知己少

村上佛山の句

賈誼

漢の政論家

(前六一四九三)

蘇軾

宋の政論家詩人

(二六六一七六一)

Lord Macaulay マコーレー
(1800—1859)
家 英國の歴史家

Michelangelo ミケランジェロ
(1475—1564)
家 伊太利の畫彫刻家

を敘事の間挿むあり、或は議論を挿まずして自然に主張あるあり。マコーレーの英國史は歴史にして自由主義を鼓吹し、カーライルのフレデリック傳は傳記にして人格の堅實を奨励せるなり。東洋の史傳は皆多少主張あり。爲に史實を枉ぐとの非難あれど、史實を枉げずして主張するを得ずとは謂ふべからず。

形を異にして實を同じくするは、詩と藝術、文と科學なり。立言は即ち立意にして、凡そ目的を達し得るものは、宜しく立言と見るべし。藝術家の製作に従事するは、樂しきか、樂しからざるか、樂しくとも世間の想像する所とは同じからず。ミケランジェロの工場に入りし者は彼の努力に驚かざるなし。夜更けて眠りしかと思へば、突然起きて頭に蠟燭を翳し、着手したる製作に

シスト禮拜堂
羅馬グアナ
カン宮にあ
る
天井畫は
「創造」と題
する名畫

ダーウィン

Darwin
(1809—1882)
英國の生物
學者

アルキメデス

Archimedes
(前282—212)
希臘の數學
者物理學者

従事す。シスト禮拜堂の天井畫を完成せしとき、絶えず仰ぎ居りしが、ために頸が曲らざりきといふ。上下に重んぜられて生活も豊かなりしが、肉體の満足を事とせず。繪畫及び彫刻に汲汲たりしは、苦心慘憺の間に漸く理想に近づく愉快の禁じ得ざるものありしに因りてなり。科學家は天地の美を讚歎せず。世間に美として讚歎する所も、嚴密に分解し、眼中美もなく醜もなし。ダーウィンは自ら歎じて曰ふ、吾はシェクスピアを讀みて少しも興味を感じず」と。初より感ぜざりしにあらざり、生物の研究を専らにし、遂に之を感じざるに至りしなり。アルキメデスは兵卒に襲はれし時、正に沙上に幾何學の圖を描きて、一意研究してありき。兵卒を顧みて曰ふ、暫く待て。問題を決せん」と。言ひ畢らずして殺さる。傳説にてはあれど、科學家の研究に專

らなること往々此の如きものあり。眞に研究を念とするものは、必ず別に楽しむあり、常人の楽しむ所と異なり。稱して楽しむといふべからずんば、他の何物にも代ふべからざる方針を取りて進みつゝありと謂ふべし。

英雄何必讀書史

清の鄭板橋の句

大丈夫

後漢の馬援の語

男兒

北齊の高昂の語

「英雄何必讀書史」とは單に東洋のみならず、何處にも言ひふるしたることなり。泰平無事の日には斯く考ふる者多からざれども、警報傳はりて多少世間の動搖する時には風雲に際會すといふを事實にせんと欲し、曰く、大丈夫當に屍を馬革に裹むべし、曰く、男兒當に天下を横行して富貴を取るべし」と。出でては將入りては相若し之を併せ得ること困難ならば、せめて其の一を得るの愉快なるべきを思ひ、軍人たらんか、政治家たらんか、遠きは歴山、近きは奈破崙、人生れて彼の如くなるを得ば、萬死して憾な

しとす。其の何れが望ましきかと問へば、言ふまでもなく天下を掌にし、事として意の如くならざるなきに在れど、彼等果して世人の想像するが如く愉快を感じたりしか。歴山は天真爛漫、直情徑行、一切の偽善を憎み、波斯に遠征して波斯の歡樂に耽りしに似たれど、彼は苟も無道といふを敢へてせず。當時の社會情態より考ふれば、身を律するの嚴なりしを認めざる能はず。彼の愉快を感ずるは富貴にあらず、無上の權を振ふにあり。歳三十にて歿し、能く彼の如きを致したるは偶然にあらず、奈破崙の幸福なるは十七歳までなりといふものあるは、即ち爾後野心に驅られて東奔西走し、一日も心の安寧を得ざりしを指すなり。されど奈破崙の愉快を感ずるは、安樂の生活より寧ろ南征北伐の間に存せずや。肉體に苦痛あれど、己の力を伸し得る所

に満足を感じたるならん。彼は一種の理想に生き、之に近づくを以て満足せしもの、その羅馬を模範とし、世界の地圖を改め、永遠の平和を圖れる、實に時代を超越せる觀あり。衣囊にホーマーを置き、劍を以て世界を斬從へんと、の抱負を遂行せんとし、胸中の悶々たる時には、涌くが如き智略とアルプスを抜く勇氣とに快感を覺えたるべく、遠洋の孤島に流さるゝや、居常鬱々たりとはいへ、自ら古の英雄に比較して満足を感じざるものゝ如し。彼は不可能を追求して智囊を絞りし爲に何れの邊まで人智を働かし得るかを示し、英雄の出づる獨り古代に限らず、後世猶古英雄を凌ぐものあるを證明せり。青年の功名に急なるものは、政治家たらんことを希望するもの多し。何れの國にも法政の學を修むるものゝ多きは官吏とな

William Pitt (1759-1806) ピット 英國の政治家
 Cavour (1810-1861) カヴール 伊國の政治家

り、銀行會社員となる外、比較的功名心を満たすべき門戸の開かれ居るが故なり。山高ければ麓廣し、高き位置にあるが故に麓に集る者甚だ多し。されど高き位置に上れる政治家に何の快樂あるかといへば、世俗の所謂快樂を得ることは少なし。後世に欽慕せらるゝ者は特に然り。奈破崙に對抗して英國の權威を維持せしウイリヤム・ピットは獨身にして、國家を以て妻とす。伊國の建設に當り、獨り國政の整理に任せしカヴールは、同じく國家を以て妻とす。大いに富み大いに驕らずんば、高き位置を占むる效なしといふ者あれど、かゝる事に歡樂を求むる徒は政界に飛ぶとも纒かに蝙蝠の飛ぶが如し。大政治家の愉快は、我が施設の效顯れ、幾分にては國家社會の進善せん

Marcus Aurelius Antoninus (121-180) オーレリウス 羅馬の皇帝
 Palissy (1510頃-1589) パリッシ 佛國の陶工

とするを見るにあり。古代には諸葛孔明の如き、マルクス・オーレリウスの如き傑出せるものありき。機械の應用は近世に入りて加速度の進歩を遂げ、商業・工業・農業は之が爲に重きを加へ、嘗て立功家として軍人及び政治家を推したるもの、今は之に商業家・工業家・農業家等を加へざるべからざるに至れり。貧困は發明に必要ならず、富みて新工夫を運らすあり、貧困を忍びて成し遂げたる事業の價值の少なきもあれど、新發明・新工夫の記録は、半面より觀て貧困との鬭争なり。パリッシの如きは一の極端なる例とすべし。實際に於て、勇者は世に益すること多きにもせよ、後人を感奮し、努力せしむるは、一切を抛擲して事に専らなるもの、傳記にして、事業としての直接利益の外、間接に人心に益する所多し。「彼も人、我も人、我豈彼

の如くなるを得ざらんや。」と後人の發憤するは富貴にして歡樂に耽る所にあらず、己の爲すべきを信じ、斃れて後已まんとする所に在り。爲に人は往々立德の事に考へ及ぶ。帝王は一世の師、而も孔子の廟に跪き、釋迦の寺に跪き、耶蘇の會堂に跪けり。個人の勢力にして最も廣く最も久しく影響の及ぶべきものを擧ぐれば、かく帝王を跪かしむる立德家なりとすべく、隨つて志の大なる者の、以て人生の最大快事とするは之に彷彿たるに在り。されど、彼等がたとひ能く立德家の如くなるを得たりとて、果して愉快なるを得べきか。功名心の熾なるものは、後世に於ける勢力の孔子、釋迦、耶蘇の如くなるを欲しつゝ、現在に於て孔子、釋迦、耶蘇の如き不遇又は不快なる生活を送るを欲せざるべし。もと立德は人生の美點を綜合して考へたる

もの、人生の完成を以て衆徳を具ふるにありとし、暫く史的人物を藉りて之に充つるのみ。人生最上の目的は立德なりと雖も、立德家たらんには如何にせば可なるかといへば、容易に解答を與へ難し。分け登る麓の路は多けれど、同じ高嶺の月を觀る。立德は高嶺の月なり。而して麓の路の最も主要なるものは、實に立言及び立功にあり。立言に種類あり、詩あり、文あり、藝術あり、科學あり。立功に種類あり、軍事あり、政治あり、商業あり、工業あり、農業あり。之を細分すれば頗る多數に上るべけれど、其の孰れかを念とし、十分にその能力を伸ばせば幾許か立德たること必ずしも期し難きにあらざるなり。(日本及日本人)

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 文學史, 序説, and 藝術）

國文學史

序説

もろくの藝術は同じくこれ思想感情の反映なり。中にも文學は言語文字を以て表現の材料とするが故に、他の藝術即ち音響による音楽、色彩、線條、形體による繪畫、彫刻、建築、肢體の運動による舞踊、さてはこれらを綜合せる演劇等に比して最もその永續性と普及性に富めり。是、文學史が藝術史上特に重要な地位を占むる所以なり。苟も國民文化の由來を尋ね、將來その理想的發展を遂げしめんには、國文學史によりて我が祖先の精

神生活を味はひ我が國民性の特色を研究せざるべからず。今左に國文學史の大要を説かん。

一 上古の文學

第一 祝詞

上古の祭祀は即ち政治なり。故に政を訓じて「まつりごと」といふ。敬神崇祖の民族が皇室を中心として祭祀の庭に集り、祖先の勳業をしぬび、よりて以て團結せるは即ち我が建國の體裁なり。この時未だ文字なし。必ず口々に傳誦せられたる詩的美辭ありてこの祭祀に伴ひしならん。壽詞ユヰといひ、祝詞イハヒといふもの即ち是なり。

祝詞は、天皇即ち現神の命令によりて神祇に白す詞にして、常に國家の安穩國民の幸福をねぎ求むるを以て主眼とす。國民が現世の福祉を求め、清淨を愛する風は、皆祝詞の中に之を認むべく、支那・印度の文明の感化未だあらはれざる上代の國民思想は明かに我が祝詞式の祝詞にあらはれたりといふべし。

文辭上より祝詞を見んか。その語彙の數は甚だ多からず。「常磐に堅磐に、祓へ給へ、清め給へ」の如く對語を連用すること多し。こは單語のみならず、句に於ても亦然り。「朝には御門を開き、夕べには御門を閉て、みかのへたかしり、みかのはらみてならべ」の類是なり。かく同一音同一語を反復するは、一面に於て單調に陥るを防ぐと同時に、又自ら莊重正大の風を添ふる所以なりといふべし。

祈年祭の祝詞

原文
辭別伊勢坐天
照太御神太前
白久……

荷前
初種

辭別きて伊勢に坐す天照太御神の太前に白さく皇神の見はるかしま
す四方の國は天のかき立つ極み國のそき立つ限青雲の靄く極み白雲
の墜り居向伏す限青海原は棹柁干さず舟の體の至り留る極み大海原
に舟滿ち續けて陸より往く道は荷の緒結ひ堅めて岩根樹根踏みさく
みて馬の爪の至り留る限長道間無く立ちつゞけて狭き國は廣く峻し
き國は平けく遠き國は八十綱打掛けて引寄する事の如く皇太御神の
寄さし奉れば荷前は皇太御神の太前に横山の如く打積み置きて残り
をば平けく聞しめさむ。又皇御孫命の御世を手長の御世と堅磐に常
磐に齋ひ奉り茂し御世に幸へ奉るが故に皇吾睦神漏伎神漏彌命と鶴
じ物頸根つきのぬきて皇御孫命の宇豆の幣帛を稱辭竟へ奉らくと宣る。

(延喜式)

第二 歌 謠

上代の歌謠はその形式未だ一定せず。一句の語數も定りなく、
長歌短歌の別もなし。唯長短句を錯綜せしめ、疊句對句を列ね
て聲調をよくするのみ。その内容は極めて單簡にして、物に觸
れ事に感じて纔かに直覺的情緒を述べたる者に過ぎず。然れ
ども、自然と人とを結合することは早く已にこゝにあらはる。
敵軍の來襲するを雁の田に下るといひ、戰亂の治るを雨の歇む
に喩ふる類、皆人事を以て自然に喩へたるものなり。かくて上
代の歌謠は個人的抒情詩として、祝詞は民族的祭神の詞、寧ろ敍
事詩として、國民最古の詩的產物たり。支那文化の影響の未だ
及ばざりし太古國民の文學として、興味之最も深きを覺ゆ。

神武天皇長髓彦を撃ち給はんとせし時詠み給へる

我は忘れじ
皇兄五瀬命が孔
舍衛で賊の爲に
痛手を負うて葬
ぜられたことを
ばいつまでも忘
れまい
相模の小野
今の駿河國鐵津
のあたり

みづくし久米の子等が垣もとに植ゑし竈口ひく、我は忘れじ、聲
ちてしやまじ。

日本武尊の御妃弟橘媛海に入り給ひし時詠み給へる

さねさし相模の小野にもゆる火の火中に立ちてとひし君はも。

(古事記)

萬葉集は短歌四千百餘首、長歌二百六十餘首、旋頭歌六十餘首の
大歌集なり。萬葉時代、委しくいへば、藤原朝即ち持統、文武の朝
以後、始めて和歌の形式の非常に擴大し、長歌の發達せしは顯著
なる事實とす。中にも柿本人麿の作歌には長篇頗る多く、その
歌雄渾壯大なり。上代の文學としての祝詞は古來の舊辭を敍
し、傳説を述べて數百言を陳ねたるに、咄嗟の間に成るを主とせ
る歌謠は概ね五十言に滿たず。今や人麿は民衆共同の祝詞の

形式を以て之を個人の抒情詩に應用せしなり。然れども人麿
が功績は單にその形式を擴大せしのみにはあらず、實は祝詞中
に含有せる敬神崇祖の精神を抒情詩として歌ひ出せるに存す。
山部赤人は人麿に比すれば概して詩形の簡單を喜び、歌中の句
法も亦短き文に分割し得べく、人麿の如く一瀉千里の勢なし。
その長は瀟洒にあり、簡潔にあり。富士山の歌の如き、雲、雪、山河
等の語を用ひたるのみにて、高潔崇高の風韻を帶ぶること富士
山そのものに彷彿たり。これ亦祝詞の神を傳へたるもの。山
上憶良に至りては、支那に遊べることあり、漢學に通じ、佛説を喜
ぶ。詠ずる所皆支那思想、印度思想に基づき、歌の序としては、漢
文の四六文を用ひ、儒佛の影響最も顯著なり。

第三 歴史

大化の改新支那文化の輸入は自ら國運の進展を促し、茲に修史の事業は起り、地誌の編纂は企てられたり。その古事記、日本書紀は傳へて今日に至りたれども、風土記は多く亡佚せり。古事記は神代より推古天皇までの歴史にして、稗田阿禮が舊辭を誦誦せるを太安麿等が筆記せるものなりといふ。従つてその文は大體古くより口々に言傳へたるまゝに寫せるものなるべく、日本第一の古典なり。就中神代の卷は神話傳説、歌謠等に富み、最も趣味多し。日本書紀は漢文の國史にして、國文學としての價値は少なし。

稻羽の素兎

原文
八十神各有欲
婚二稻羽之八上
比賣二之心共行
二稻羽二時於二大
穴牟遲神二負二倍
爲二從者二率往二

八十神ちのもく、稻羽の八上比賣を婚はむの心ありて、共に稻羽に往ける時に、大穴牟遲神に倍をちほせ、從者として率て往き。こゝに氣

氣多之前
因轉國氣多郡の
海濱にその遺跡
がある

和邇
わにざめといふ
熊の一種であら
う

多之前に到りける時に、裸なる菟伏せり。八十神その菟に云ひけらく、汝せむは、この海鹽を浴み、風の吹くに當りて、高山の尾上に伏してよ。といふ。故其の菟八十神の教ふるまゝにして伏しき。こゝにその鹽の乾くまに、其の身の皮悉に風に吹裂かえしからに、痛みて泣伏せれば、最後に來ませる大穴牟遲神其の菟を見て、何ぞも泣伏せると問ひ給ふに、菟をさく、僕淤岐の島にありて、此の國に渡らまく欲りつれども、渡らむよし無かりし故に、海のと邇を欺きて言ひけらく、「吾と汝と族の多き少きを比べてむ。故汝は其の族のありのごと率て來て、此の島より氣多之前まで、皆列み伏しわたれ。吾その上を踏みて走りつゝよみ渡らむ。こゝにあが族と何れ多きといふことを知らむ。」かくいひしかば、欺かえて、列み伏せりし時に、吾其の上を踏みてよみ渡り來て、今地に下りむとする時に、吾汝は我に欺かえつ。」と言

ひ竟れば、即ち最端いっぺんに伏せる和邇我わにがを捕へて、悉に我が衣服いふくを剝ぎ、此に因りて泣き患ひしかば、先だちていでまし、八十神のみこともちて、「海鹽を浴みて、風に當り伏せれ」と教へたまひき。かれ教のごとせしかば、我が身悉にそこなはえつとまをす。

こゝに大穴牟遲神その菟うに教へたまはく、今とくこの水門に往きて、水もて汝が身を洗ひて、即ち其の水門の蒲の花をとりて敷きちらして其の上に輒ひい轉びてば、汝が身もとの膚の如必ず癒えなむものぞと教へ給ひき。故教の如せしかば、其の身本の如くになりき。これ稻羽の素菟といふものなり。今に菟神うさぎのかみとなもいふ。故その菟大穴牟遲神うさぎのかみに白さく、此の八十神は必ず八上比賣を得たまはじ。俗を負ひたまへれども、汝が命を獲たまひなむとまをしき。(古事記)

太古より奈良朝に至るまでは、その間の年代頗る長く、一般文化

の發達、之を祖先建國の昔に比ぶれば、亦實に霄壤の差ありしなるべし。然れども未だ國字を有するに至らざりき。今總じて之を上古と稱す。(國文學歴代選に據る)

二 平安朝時代の文學

第一 和歌

平安朝時代は支那の文化の次第に我が文化と融合したる時代にして、我が特有の文化も亦次第に發展の氣運を見たる時代なりとす。所謂和魂漢才の語は實にこの時代の造語なり。就中文學上に最大の關係を有するは假名文字の製作なり。奈良朝に於ては、漢字を音韻文字として使用せしが、この時代に

紀貫之

天慶九年(866)

卒
年六十五

至り、或は之を草體にし、或はその扁旁を割きて假名となし、音標文字として用ひたるより、漢文、漢詩の製作は朝廷の科擧に必要なる科目たりしに關らず、一面に於て國語を以て記せる純國文學の發生を促し來り、當時の建築、彫刻、繪畫等が日本式の發達をなしたると同じく、文學も亦特殊の發達をなして、支那の強大なる文化に壓伏せられざりし我が國民の元氣を發揮せり。
假名文字を以て一般に國語を寫すに至りしは清和、文德以後にあらんか。韻文としての和歌、散文としての物語は相前後して著しき發達をなし、平安朝の文學界を燦爛たらしめたり。而して和歌の發達と之に對する賞翫とは、あらゆる文學の根柢をなせるが如し。

延喜の朝、紀貫之、凡河内躬恆等勅を奉じて萬葉集以後の歌をえ

らぶ。古今集是なり。古今の歌を取りて萬葉のに比すれば、その内容を增加せること最も著し。是、佛教思想と六朝詩賦の思想とを短歌中に移植したればなり。造句の法も、古今に至りては修辭上の進歩著しく、譬喩、縁語、懸詞等最も巧緻に使用せらる。萬葉集は初心なる趣ありて、簡古の味に富み、古今集は巧緻の境に進みて、勁健の趣なし。自然と人生との融合はこの時代に至りて全く完成し、春花、秋葉、雪月の美、歌に詠ずべき題目は多くの時代に確定せられ、春の鶯、夏の杜鵑、秋の蟲の音、鹿の聲、四時の景物に伴ふ禽獸もまたおのづから一定し、春の花の盛には人生の樂しき朝をおもひ、萩の上の露にははかなく消ゆる死の運命を悲しむ。和歌の約束悉くこゝに成立して、後の文學は皆之に則るに至れり。

第二 日記

貫之は和歌に於て久しく後世の模楷たりしのみならず、國文を以て始めて和歌序を作り、勅撰集序を記し、又日記をもつし、以て國文をして歌文と並行する地位に立たしむるに至れり。是貫之の國文學に於ける殊功といふべし。就中土佐日記は、土佐守の任果て、京に歸りし海路の日記にして、自ら婦人に託して之を記せり、その文體簡朴にして輕妙、往々諧謔を交ふ。日記の巨擘と稱せらる。當時男子の日記は漢文にて記し、官邊の事歴、日常交際上の事柄等を多く記入せるに對し、深窓の女子は國文を以て日記をもつしたり、而してその記事は主として閨閣の事に關し、家庭の間に限られたるは當代の事實にして、花鳥風月の媒介となれる和歌

道綱の母
藤原倫寧の女
攝政藤原兼家の
室右大將藤原道
綱の母
和泉式部
歌人大江雅致の
女
和泉守橘道貞の
室
夫の歿してのち
藤原保昌の室と
なつた
菅原孝標の女
孝標は道眞の玄
孫
孝標の室は倫寧
の女即ち道綱の
母の妹

はその波瀾に際して好箇の記念となり、讀者の感情を動かすに足れり。蜻蛉日記は右大將道綱の母の日記にして、文辭精鍊見るべし。和泉式部の日記は才華は見えなれど、輕佻浮華の本性あらはれたり。紫式部日記は中宮の侍女として宮仕の様を寫せるものにして、容貌言語より衣服調度の末に至るまで、流石に機敏なる觀察力を認むべし。更科日記は菅原孝標の女の筆に成り、紀行文あり、抒情の文あり、夢を叙し、傳説を叙す、また一種の日記なり。

第三 物語

この時代に於ける和歌の流行は、まづ和歌に關する物語を生めり。伊勢物語は和歌についての傳説集といふべく、在五中將の初冠より書き起して、その今はの時の歌を以て筆を收む。書中

のむかし男は業平のこと、解せられ、その歌も悉く業平の作と見做さるれども、業平以外の作者の歌も加はれり。要するに人口に膾炙せる古今の名歌を基礎として、その由來を説き、之に情話を附加したるものといふべく、之を名づけて歌物語と稱するを得べし。伊勢の後に、同じく名歌に關する説話を收めたる大和物語あり。伊勢物語と相並びて後の歌人に尊崇せられたり。竹取物語は物語の祖と稱せらるれども、後の物語類とはその性質を異にし、月中女子の傳説を骨子とす。その説話の一段毎に言語の滑稽を以て結び、之に和歌を添加せるは、尙歌物語の性質を有せりといふべし。うつほ物語、落窪物語等これについて出て、遂に平安朝物語の白眉として源氏物語は生れたり。源氏物語五十三帖は紫式部の著す所なり。前篇は光源氏を主

人公としてその得意の狀を寫し、後篇の宇治十帖は薰大將を主人公としてその失意の様を敘す。全篇の脚色整然として紊れず、主人公を圍繞せる各種の女性の性格も明瞭に發揮せられ、局面の變化も亦頗る多し。蓋し源氏の大作たる所以は、人物の描寫が活躍せると共に、自然を描ける文辭の絢爛精妙たる點にあり。人事の描寫の後には必ず自然の背景を添ふ。人事と自然とを融合せる詩的思想は是に至りて最大の發達をなせるなり。その半面は和歌の趣味にして、地の文には必ず歌の景情を含めり。若し夫れ、散文としての外形より見んか、純國語として最も發達せる種々の形式を發見し得べし。故に古今集が和歌の模範文學たるが如く、源氏物語は國文として後世の模範文學となれり。源氏の用語は、恐らくは當時の上流社會貴婦人の通用語

なりしなるべし。母音多く、敬語に富める國語の一層進歩せるものにして、にをが等の接續的助辭を以ていくつとなくその句を連接しゆき、一文にして一頁に互るもの亦稀有に非ず。翫々として風に靡く野萩の花の如く、優雅艷麗、裳、唐衣、裙帶長く垂れし當時の婦人の楚々たる姿に似たるものあり。

須磨

紫式部

須磨 源氏二十六歳の時須磨に移り住まれた
心づくしの秋風 木の問よりもれくる月のかげ見れば心づくしの秋は來にけり
(古今集)
關吹き越ゆる 旅人は秋涼しくなりけり關吹きこゆる須磨の秋風(在原行平)

須磨には、いと心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、關吹き越ゆるといひけむ浦波、夜々はげにいと近く聞えて、また無くあはれるものは、かゝる所の秋なりけり。御前にいと人づくなにてうち休み渡れるに、ひとり目をさまして、枕をそばだて、四方の嵐を聞き給ふに、波たゞこゝもとに立ちくる心地して、涙落つとも覺えぬに、枕浮くばかりになりけり。琴を少し掻きならし給へる

枕浮く

獨寝の床にたまれる涙には石の枕もうきぬべくなり(古歌)

が我ながらいと凄う聞ゆれば、彈きさし給ひて、

らむ。

とうたひ給へるに人々おどろきて、めでたう覺ゆるに、忍ばれて、あいなう起き居つゝ、鼻を忍びやかにかみ渡す。げにいかにも思ふらむ、わが體ひとつにより、親はらから、片時たち離れがたく、程につけつゝ、思ふらむ家を別れてかく感ひあへると思すに、いみじくて、いとかく思ひ沈むさまを、心細しと思ふらむと思せば、晝は何くれと、たはぶれごとうち宜ひ紛らはし、つれづれなるまゝに、色々の紙をつぎつゝ、手習をし給ひ、珍しきさまなる唐の綾などに、さまざまの繪どもをかきすさび給へる、屏風のちもてどもなど、いとめでたく見どころあり。人の語り聞えし海山の有様を、遙かに思しやりしを、御目に近くては、

作り繪
墨書きの上を彩
色すること

げに及ばぬ磯のたゞすまひになくかき集め給へり。この頃の上手にすめる千枝常則などを召して作り繪仕うまつらせばやと心もとながりあへり。懐かしうめでたき御有様に、世の物思忘れて、近う馴れ仕うまつるを嬉しきことにて、四五人ばかりぞつと侍ひける。前栽の花いろ／＼咲亂れ、おもしろき夕暮に、海見やらるゝ廊に出で給ひて、たゞすみ給ふ御さまの、ゆゝしう清らなるに、ところからはまして、この世のものとも見え給はず。白き綾のなよゝかなる紫苑色など奉りて、こまやかなる御直衣、帯しどけなく、うち亂れ給へる御さまにて、釋迦牟尼佛弟子と名のりて、ゆるゝかによみ給へる、また世に知らず聞ゆ。沖より舟どもの謠ひのゝしりて漕行くなども聞ゆ。ほのかにたゞ小さき鳥の浮べると、見やらるゝも心細げなるに、雁のつらねて鳴く聲、楫の音にまがへるをうちながめ給ひて、御涙のこぼ

るゝをかき拂ひ給へる御手つき、黒木の御數珠にはえ給へるは、ふるさとの女こひしき人々のこゝちみな慰みにけり。

源はつかりはこひしき人のつらなれや、旅のそら飛ぶ聲のかなしき。

と宣へば、良清

「かきつらねむかしのことを思ほゆる、雁はそのよの友ならねども。」

民部大輔

「こゝろからとこ世をすてゝなく雁を雲のよそにもおもひけるかな。」

前の右近丞

「常世いでて旅の空なるかりがねもつらにおくれぬ程ぞなく

さむ。

友惑はしてはいかに侍らましといふ。親の常陸になりて下りしにも誘はれて參れるなりけり。したには思ひ碎くべかめれどほこりかにもてなしてつれなきさまにしありく。源氏物語

第四 隨筆

源氏物語と相雙びて國文の雙璧と稱へらるゝものは清少納言の枕草子なり。枕草子の妙はその隨筆たる點にあり。忽ちにして人事、忽ちにして自然、或は公事を評し、或は人物を品し、或は自己を誇り、或は皇后を褒め、閲讀の間多種の事件に遭遇して、殆ど應接に遑あらざるなり。その變化、その錯綜、こゝに始めて全篇の妙味を成し來る。文章の妙味も亦句法の錯綜にあり。或

は長句、或は短句、忽ちにして花をいひ、忽ちにして、小兒に移り、又草花を點じ來り、再び人事に入り、忽ちにして今、忽ちにして昔、時と場所とを右往左往し、天地間の萬物、人事と自然とを問はず種雑多に、想像の到るかぎり捕捉し來る。その變化轉換の妙即ち人を魅するに足るなり。枕辭、懸辭の妙味は、元來人をして一事を思念せしめて忽ち他の事物に轉ぜしむるにあり。枕草子の文は即ちその手段の最も發達せるものなり。或事柄に執着固定せずして、一時に多方の興味を惹き起す妙機を捕へ得たる所以は、即ちその文の輕妙洒脫の氣を帶ぶる所以なり。平安朝の世は平安の都の今を盛と榮えたる時にして、上流の紳士は、詩歌に、音樂に、舞踏に、風流閑雅の技を弄べり。その束帶の裾を曳きて頻繁なる年中行事に仕ふるには如何に優美なりけ

ん。それらの面影は各種物語の上に想見すべきなり。しかも平安朝の上下の事情を見るべきものは今昔物語に如くはなし。今昔物語は文學の作品といふべからざれども印度支那日本に互りて種々の奇談雑話を類聚したるを以て、啻にわが國の傳説を知る上に於ての珍書たるのみならず、眞に世界傳説研究者に取りて至寶といふべし。抑、儒佛二教が我が國民の思想界を一變せしめたるは言ふまでもなけれど、之と共に各種の傳説童話も亦輸入せられ、僅かに其の人と處との名を改めて日本化せるもの甚だ尠なからず。凡そ我が國佛教渡來以前には因果應報の談もなく、輪廻轉生の説もなく、禽獸妖怪の話もなかりき。今昔は國文を以てこれらの多數の説話を集め得たり。鎌倉以後に至つて、これらの説話は皆文學の中に吸收せられ、一面より見

れば、大いに我が文學をして豊富ならしめたるもの、今昔の中にその淵源を探り得べし。

木寺基増依物語付異名語

今は昔、一條の攝政殿の住み給ひける桃園は今の世尊寺なり。そこにて攝政季の御讀經行はれける時に、山三井寺、奈良のやむごとなき學生共を選びて請ぜられたりけるが、皆參りたりけるに、夕を待つ程に、僧ども居並みて或は經を讀み、或は物語などしてなむ居たりける。寢殿の南面を御讀經所にしたりければ、其の御讀經所に居並みてある程に、南面の山池などのいみじくおもしろきを見て、山階寺の僧中算がいはいはく、あはれ此の殿の木立は、異所には似ずかしといひけるを、傍に木寺の基増といふ僧居てこれを聞くまゝに、奈良の法師こそ尙疏き者はあれ。物いひ賤しき者かな。木立とこそいへ。木立とい

一條の攝政殿
藤原伊尹
桃園
京都一條北大宮
通の西
世尊寺
桃園にあつた寺
山
比叡山延曆寺
三井寺
園城寺
奈良
興福寺
東大寺
山階寺
中臣鎌足が山城
國山科に建てた
寺
その子不比等が
奈良 遷して興
福寺といふ

ふらむよな。うしろめたなきの言や、といひて、爪をはたゝとす。中算かく聞く儘に、悪しく申してけり。然らば御前をば、小寺の小僧とこそ申すべかりけれ、と云ひければ、ありとある僧ども、皆これをきゝて聲を放ちて夥しく笑ひけり。その時に攝政殿この笑ふ聲を聞き給ひて、何事を笑ふぞ、と問はせ給ひければ、僧どもありの儘に申しければ、殿これは中算がかくいはんとして、基増が前にて言ひ出したる事をいかでか心を得ずして、基増が案に落ちて、かくいひたるこそつたなけれ、と仰せ給ひければ、僧どもいよゝゝ笑ひて、それより後、小寺の小僧といふ異名はつきたるなりけり。あじさなく物咎めして、異名つきたるとてなむ、基増は悔しがりける。此の基増は……の僧なり。木寺に住みけるによりて、木寺の基増とは云ふなり。中算はやむごとなき學生なけりけるに、またかく物言ひなむをかしかりけるとな

む語り傳へたるとや。(今昔物語)

第五 歴史

平安朝初期の歌物語一變して小説的物語となり、日記となり、再變して歴史物語を生ぜり。

榮華物語は全篇四十帖、村上天皇の月の宴に始りて、堀河天皇の紫野の卷に終ると雖も、要は關白道長が一代の榮華を寫せるものなり。この書一名世繼物語と稱せしは、歴史物語といふにひとし。歴史と稱すといへども、宮廷の歴史なり、後宮の歴史なり。この點に於ては假構物語といくばくも異ならず。物語の名も亦ふさはしといふべし。

文學上の價值より見れば、大鏡は遙かに榮華の上にある。大鏡は歴史として列傳體を取れり。而して藤氏の榮華を寫すは全

く榮華に等し。雲林院の菩提講に來り合へる大宅世繼・夏山繁樹二人の老翁の談話として之を記し、間傍聽者の意見を挿み全體の構造の詩的なるは文學的の性質を存して、正史のこちんしきところなし。その文の勁健にして筆端褒貶の意を含めるは、おそらくは男子の作なるべし。この二者は藤原氏時代の最後の文學として藤原氏時代の最後の榮華を寫せる者なり。之を要するに、平安朝時代は前後四百年に互り、古代文化の最も光彩ありし時代にして、江戸時代と共に我が國に於ける文學隆盛の二大時期とす。されど當時の文化は上流の社會に限られて一般の社會に及ばず、事物の發達すべて貴族的傾向を帶び、第宅・衣服等實用を離れて粉飾に過ぎ、輕快を重んぜずして綺麗を喜ぶ。従つて文學も、物語は深窓消閑の玩具、和歌は貴族交際の

媒介として帝都上流の間に行はるゝのみ。下流の情態を寫したる作品は、殆ど世に出てざりき。(國文學歴史代選による)

三 鎌倉室町時代の文學

第一 軍記

源頼朝幕府を鎌倉に開きて、政體こゝに一變す。公卿は政權を失ふと共に意氣沮喪し、武人は兵事に勵めども文事に疎く、庶民は數度の戦亂に疲勞し困憊して生活に餘裕なし。従つて當代の文學に雄篇傑作の多からざりしは、已むを得ざる所なり。當時専ら武家の祐筆となり參謀となりて文筆に従事したる者は僧侶にして、純文學の如きも多くは其の手に成れり。されば、

この時代の文學に佛敎的傾向の存すること平安朝より甚だしく、到るところに無常輪廻の思想を見るは、一は僧侶の手に成れるがため、一は時勢の然らしめし所にして、實に當時の頻繁なる變亂は社會をして自ら厭世に傾かしめ、盛者必衰會者定離の觀念の深く人心の根柢に染みたること、また舊時の比にあらざりしを思ふべし。

當時漢學漸く衰へ、上流の士も多くは純粹なる漢文を書き得ず、こゝに和漢混淆の一種特別なる文體を生ぜり。和漢混淆體の大いに光彩を放ちたるは、源平争鬪の次第顛末を記したる軍記類なり。抑、源平二氏が盛衰の迅速なるや、これを見聞する者をして、自ら一種悲壯の感に打たれざるを得ざらしむ。こゝに於てか軍記の作あり。その最初に出でたるものは、保元平治の兩

物語にして、共に簡勁を以て勝れたり。ついで出でたる平家物語は蓋し曲節を附して諷誦せんが爲に作られしものなるべく、縦に雄大壯悲なる戰記を以て貫き、横に哀憐優雅なる物語を錯綜して、其の間にまた幽玄奥妙の佛敎趣味を點綴す。されば治承の春を名殘に、壽永の秋に西國さして落ちゆける、夢よりもはかなき平家一門が榮枯盛衰の記述には、言々涙あり、句々同情あり、讀む者をして、讀誦一過、忽ち無常厭世の感を懷いて佛道に歸入せしめずんばやまざらんとす。その冒頭を、祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を現す。といふに起して、最後の卷には、建禮門院が後白河法皇への物語に、其の經過せる一生を六道に譬へたまへりといふに考へても、以て其の全豹を推すに足るべし。源平盛衰記は、平家物語の一

本とも謂ふべく、たゞその記事詳密にして、文章頗る華麗なるを異なりとするのみ。

太平記は平家物語に倣ひて作れる者にして、後醍醐天皇の御即位に筆を起し、爾後五十年間の戦亂の始末を記述す。中興の事業に多大の同情と尊敬とを捧げ、數多の忠孝節義の士の事蹟を點綴して、其の間に倫理的・宗教的觀念を鼓吹せるを見る。文體は漢字を用ふること更に著しく、文脈亦漢文調を加へたり。

義經記・曾我物語の二書は個人に關する敘事詩と見るべく、一は源平武人中最も傳奇的生活をなせる義經を主人公とし、一は孝子復讐の嚆矢なる二孤を主人公とし、共に貞操人情を主としたる物語を傳へたり。從來の軍記に比して一層平民文學に近づけるを認む。

第二 隨筆

軍記に先だちて、和漢混淆體の文を用ひて、成功したるは蓋し方丈記なるべし。方丈記は鴨長明が源平の紛争絶え間なき世を厭ひて山城の日野に隱栖せることを記せる短篇にして、文辭の流暢を以て顯る。

紀行文には阿佛尼の十六夜日記あり、土佐日記の系統に屬す。東關紀行・海道記等あり、作者は詳かならず、國語漢文を混和し、古歌古句を引用するところ鎌倉文學の性質をあらはせり。是らのものと稍その趣を異にし、率直平易なる文體にて書けるものに十訓抄・古今著聞集・宇治拾遺物語あり。何れも平安朝時代に出でたる今昔物語などに倣ひて古今の面白き事實を集めたるものなり。

徒然草は兼好法師の作にて、その趣味を談じ、世態人情を説く間に著者が修得せる道徳主義によりてよく皮相の虚飾を透して隠れたる社會の裏面を觀察し、爬羅抉剔痛快にそが矛盾撞着のあるところを暴露せり。文章も亦暢達にして雅馴、交ふるに奇句警語の天外より落ち來るものを以てし、かの枕草子と併せて以て隨筆の雙美と稱せらる。

行く川の流

鴨長明

行く川のながれは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつきえかつ結びて、久しくとゞまることなし。世の中にある人と住家と又かくのごとし。玉敷の都のうちに、軒を並べ薨を争へる、高き賤しき人のすまひは、代々を経て盡させぬものなれど、是をまことかとたづねれば、むかしありし家はまれなり。ある

は去年やぶれて今年を作り、あるは大家亡びて小家となる。住む人もこれにおなじ。處もかはらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に僅かに一人二人なり。朝に死に夕に生るゝ習、只水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、何方より來りて、何方へか去る。又知らず、假の宿誰が爲にか心を惱まし、何によりてか目を悦ばしむる。其の主と住家と、無常を争ひ去る様いは、朝顔の露に異ならず。或は露落ちて花残り。残るといへども、朝日にかれぬ。或は花は萎みて露尙消えず。消えずといへども、夕をまつことなし。

(方丈記)

螢火亂飛

ある殿上人、五月の廿日餘の頃いと暗きに、太後の宮に參りて、馬道にイみけるに、うへより人の音のあまたして來りければ、さりげなく引

螢火亂飛
螢火亂飛秋已近
辰星早沒夜初長
(朗詠集元續)
太后
一條天皇の中宮
藤原彰子上東門
院

夕殿
夕殿螢飛思悄然
孤燈挑盡未成
眠。
(長恨歌白樂天)
かくれぬもの
つよめどもかく
れぬものは夏蟲
の身よりあまれ
る思なり
(後撰集讀人不
知)

さかくれて覗きけるに、壺の遣水に、螢の多くすだくを見て、さきなる女房、ゆゝしき螢かな、集めたらんやうにこそ見ゆれ。とて過ぐるに、次なる人、優なる聲にて、「螢火亂れ飛びて」と口ずさびけり。又次なる人、「夕殿に螢飛びて」とうちながむ。しりなる人、「かくれぬものは夏蟲」と花やかにひとりごちたりけり。とり／＼にやさしくおもしるくて、この男、何といふ一ふしもなからんがほいなくて、ねずなきをして出でたけければ、さきなる女房、ものおそろしや、螢にも聲のありけるよ。とてつや／＼騒きたる氣色もなく、うちしめりたる空おぼめきのほど、あまりに色深く、悲しうおぼえけるに、今ひとり、泣く蟲よりもそこそ思ひしかと取りなしたりける、これ又思ひ入りたるほど、堪へがたく奥ゆかしかりけり。すべて取り／＼にいとやさしくぞおぼえける。その心は、

音もせでみさをにもゆる螢こそなく蟲よりもあはれなりけれ。
(十訓抄)

第三 歴史

歴史としては神皇正統記、増鏡等最も見るべし。神皇正統記は准后北畠親房の著にして、建武中興の業敗れて王道の衰頽せるを憤慨し、古の歴史に照して皇統の正閏を論じ、三種の神器の在るところ、即ち名分の存するところなるを疾呼せるものなり。是、實に國文を以て綴れる議論文の權輿ともいふべく、婉曲なる字句のうち、博大なる風格を藏して、堂々としてまた朗々たり。増鏡は大鏡に倣ひて、後鳥羽天皇御即位の始より後醍醐天皇の隱岐より還幸せられしまで、凡そ百五十年間の事蹟を記述せり。記事客觀的にして、毫も著者の主張を交へず、文章亦流麗なり。

第四 和歌

和歌は其の初期に於て最も盛にして、元久二年には、後鳥羽天皇の勅により、藤原家隆等新古今和歌集を撰せり。延喜以降、和歌の勅撰實に八度に及びしが、就中古今と新古今と殊に勝れたり。新古今は其の名の示す如く、よく古今を改造して、加ふるに客觀的叙景の新調を以てし、別途に比較的圓滿なる發達を遂げしものといふべく、句調流麗、その新奇なること前古無比と稱せらる。従つて當時有名なる歌人亦少なからず。まづ俊成あり、西行あり、寂蓮あり。關白良經は天授の才を以て時流の歌を詠じ、將軍實朝は萬葉の古調を喜びて金槐集を成す。定家は俊成の子にして、家隆と共に名匠の譽一世に高く、前者が措辭の巧緻を喜べば、後者は最も暢達の調を尙べり。

二條良基
攝政太政大臣藤原良基
元中五年(1194)
薨
年六十九
宗祇
飯尾氏
連歌師
元龜二年(1571)
寂
年八十二

又和歌に代りて、連歌の興れるもこの時代のことなり。先に二條良基これを好み、勅撰に准じて菟玖波集を撰したりき。後に宗祇の出づるに及びて、その流行絶頂に達す。宗祇旅行を好みて歌才を養ひ、曾て定居なし。勅を奉じて新撰筑波集を撰す。海内風靡して斯道の宗と仰ぐ。門人に宗長・肖柏最も名ありき。戦國の世、文運いよく衰へ、都鄙の懸隔減じ、貴賤の階級壞れ、京師の貴族等が文學を獨占したる風の失はるゝや、連歌は武人消閑の具として用ひられ、漸く平民文學としての傾向を示する至りぬ。

水無瀬三吟百韻のうち(連歌)

雪ながら山もとかすむゆふべかな

ゆく水遠く梅にほふ里

宗祇

肖柏

河風にひとむら柳春みえて、

宗長

舟さす音もしるきあけがた、

宗祇

月やなほ霧わたる夜に残るらん、

肖柏

霜ちく野原秋はくれけり、

宗長

第五 謠 曲

室町幕府の世になりては、戦亂相繼ぎて隣戰遠攻に干戈相見えざる日とはなし。一時小康を見たる義滿の代の如き、實は大風到らんとして暫く平穩を持する時の如きのみ。永享に嘉吉に一波は一波より甚だしく、應仁の亂に及びては遂に急潮突破して、風伯叫び、電將狂ひ、雷神轟く大混亂、京都を中心として天下をこの混沌溟濛の裡に漂はすこと前後百餘年、上下擧つてその堵に安んずることを得ず、怨嗟の聲うたゝ四方に満ちぬ。艶麗

なる百花は平和なる春にこそ咲誇れ、かくすさまじき亂離の秋にいかでか榮えん。されば文學の如き、全く度外に置かれて、毫も發達すべき餘裕を存せざりしなり。

されど應仁の亂までは、流石に幕威尙地に墜ちず、殊に將軍義滿は、柔弱にして遊樂を好み、義政は戰亂に遭へりと雖も社會の辛酸を知らざるが如く、それ〴〵閑居を設けて、文雅風流を樂しめり。されば水墨の畫、香茶の技などの發達せしもこの時にして、能樂の勃興に伴ひて當代唯一の文學たる謠曲を生じたるも、實に此の時代なりとす。

謠曲は將軍義滿の時、世阿彌元清によりて殆ど大成せられたるものにして、その中には多く、佛教の思想を含む、趣向は幽靈顯れて往事を語り、巡錫の途なる名僧知識の回向によりて、成佛す

るもの多きを占む。詞句は好んで古文辭を補綴すれども、皆よく諧和して球を轉ずる如き好調に富む。能樂の餘興に狂言といふものあり。その技、能樂の嚴正なるに對して滑稽を旨とし、概して罪もなき失策談にて、中にも迂愚なる大名を主人公とせるもの多く、巧に人情の弱點を捕へて、誇張過大の脚色、よく人の願を解かしむるものあり。その文は當時の言語をその儘に寫せるものにして、率直愛すべし、之を要するに、この時代は多少特色ある文學を産せざりしにはあらざれども、上に平安朝を承けてその後殿たり、下に江戸時代を起すべき先驅たり、まづは兩盛時を繋ぐ連鎖たる時代と謂ふべし。〔日本文學史教科書に據る〕

四 江戸時代の文學

江戸幕府の世は泰平打續きて、殆ど兵戈の動くを見ず、文化の進歩前古に比なし。學問藝術上下に弘通して、四民ともにその澤を享け、文學の滋味も普く一般に味はるに至れり。されど幕府の施設漸く成るに従うて、戰國の世に壞れかゝりし階級の制も更に立ち、従うて文學にも貴賤の別なきを得ず。上流の人は詩歌を詠じ、下流は俳諧を遊び、彼は學問にわたるものを喜び、此は戯曲小説の類を愛し、彼は古文を墨守して固陋に流れ、此は新作に傾倒して卑俗に陥る。學識あるものは新興の文學を賤しみ、新興の文學に就くものはみづから卑うして高尚なる趣味を

解せず。かくて戯曲小説の如きは戯作を以て目せられて、正當なる文學上の地位を得ること能はざりき。江戸時代の前期は京阪を中心とせる文學にして、寛永に萌し、元祿をその盛時とす。所謂元祿文學なり。後期は江戸を中心とせる文學にして、寶曆寛政を経て文化文政をその絶頂とす。所謂大御所時代の繁昌は文學にもあらはれたるものなり。今、江戸時代の文學を左に概説せん。

第一 漢學

抑、江戸時代に於て文學復興の魁たりしは漢學なり。されど、寛永の頃は打續きたる戦亂の後を受けて、未だ詩文に心を潛むべき餘裕なく、有識の士は寧ろ儒教によりて社會の秩序を恢復せんとしたり。かくて儒教の興隆に功ありしを藤原惺窩・林羅山

鳳岡
林信篤
享保十七年(三三)元
一〇夜
年八十九

木下順庵
名は貞幹
元祿十一年(三三)五
〇夜
年七十八

とす。家康の京都にあるや、屢、惺窩を延いて經史を講ぜしめしが、多くは辭して出でず、門下の俊才羅山を薦む。これより羅山の子孫代々儒を以て幕府に仕ふ。この二人が奉ぜしは宋の朱熹の學なり。朱子學は實に惺窩羅山等出でてより大に世に行はるゝに至れるなり。朱子學の外に、近江の人中江藤樹、明の王陽明の學を奉じて實踐躬行を勵み、近隣その徳に服して皆善に移れりといふ。熊澤蕃山これに學び、備前侯に仕へて治績あり。元祿時代に至るや、將軍綱吉漢學を好み、屢、儒者を集めて經義を討論せしめ、又自ら經書を講じ、諸侯も競うて儒者を聘す。かくて漢學頗る熾に、學者一時に輩出す。林家には羅山の孫鳳岡幕府に信任せらる。木下順庵は京の人、後江戸に出づ。その學博通不偏を旨とし、門下に新井白石・室鳩巢等著名の士多し。殊に

伊藤仁齋

名は維楨

寶永二年(三六七)

歿

東涯

年七十九

歿

伊藤長胤

元文元年(三九九)

歿

荻生徂來

年六十七

歿

字は茂卿

享保十三年(三六六)

歿

朱舜水

名は之禮

天和二年(三三三)

歿

年八十三

白石は學博く識高く、有益の著多く、行文犀利にして透徹せざる所なし。眞に古今を通じて稀なる文豪なり。伊藤仁齋また京に起り、朱子學は孔孟の古意にあらざるとして別に古學を立てその子東涯博覽にしてよく父の學を祖述す。荻生徂來江戸に在り、また朱子學を駁して古文辭學を立て、仁齋父子と東西に對峙せり。

第二 國學

元祿時代に於て和漢の文學に大功ありしを水戸侯徳川光圀とす。明の遺臣朱舜水を聘して學を講ぜしめ、又彰考館を開きて大日本史を撰す。その學の重んずる所、大義名分を正すにありき。光圀身は幕府の近親、奉ずる所は支那の儒學なり。この境遇の桎梏を脱し國體の存するところを明らかにして自覺せる國民

下河邊長流

貞享三年(三三六)

歿

年六十三

釋契沖

元祿十四年(三三九)

歿

年六十二

荷田春滿

元文元年(三九九)

歿

年六十九

の指南車たらんとせる光圀亦偉なるかな。光圀又古典の研究に志あり。下河邊長流に託して萬葉集を註釋せしむ。長流は大和の人、歌文に通じ、中古以來の僻説を捨て、先人未發のを見立つ。不幸業を終へずして歿す。釋契沖その業を繼ぎ、萬葉代匠記を著す。契沖攝津の人、僧藉にありて國文を好み、造詣至りて深く、識見世に絶す。奈良文學の眞價は契沖によりて闡明せられたるなり。

享保の頃、京に荷田春滿あり。國史・律令に通じ、古意を明らむるを以て己が任とす。いはゆる國學とて古典を究めて國體のある所を學ぶは、この人に起れるなり。嘗て歌うて曰く、踏分けよ、倭にはあらぬ唐鳥のあとを見るのみ人の道かは、と以てその學風を見るべし。幕末勤王攘夷の説の沸騰せるは、

田安宗武
八代將軍德川吉宗の子
田安家の祖
明和六年(一四九)卒
年五十四

水戸の學と國學との感化與りて力ありき。賀茂眞淵は遠江の人、京に出て春滿に學び、學成りて後、江戸に來りて講説し、田安宗武に仕へて厚遇せらる。その學は春滿に繼いでわが國固有の道を明かにするにあり。謂へらく、昔、儒佛の教の傳はりしより古道はこれが爲に廢れぬ。故に古道を明らめんとせば、外國の影響なくして人意の自然に出でたる古書を學ばざるべからず。その古書は萬葉集最も善しと。よりに深くこの書を究む。その研究、契沖に一步を進め、その説く所一世に影響せり。識見甚だ高しと雖も、詩文の才は寧ろ學問に勝れり。門下に高材の士多くして、これより國學の勢、天下を席卷するに至れり。

眞淵の門人多きが中に伊勢の本居宣長、最も名あり。宣長の學

平田篤胤
天保十四年(三三〇)卒
年六十八

は一に古道を明らむるにあり。古道を知るには古事記最も貴ぶべしとして、その註釋に従事し、三十四年を経て業成る。即ち古事記傳にして、以てその深遠なる學と穩健なる見とを見るべく、實に契沖の萬葉代匠記とあはせて江戸時代國文學界の二大著作たり。宣長なほ多くの著述あり。宣長の研究態度たるや博引旁搜盡さざるなく、具さに諸説の異同を辨じ、これを歸納して始めて自家の結論に達す。故を以て論據堅實、識見超凡、洵に一代の大家たる概ありき。門流甚だ盛なりしが、歿後の弟子平田篤胤最も著る。篤胤は出羽の人。その意宣長より一步を進めて古道を以て一の宗教とし、之を弘布して、儒佛の教を斥けんとするにあり。勤王攘夷の説はこれらの論によりて益、刺戟せられたり。

第三 和歌

加藤千蔭
文化五年(三四六)
歿 年七十四

村田春海

文化八年(三四七)
歿 年六十六

香川景樹

天保十四年(三四五)
歿 年七十六

加藤千蔭、村田春海は共に江戸の人、また眞淵の門に出づ。學問は宣長の博きに比すべきにあらざれども、何れも文學に長じ、殊に歌道に於ては、所謂江戸派の代表者たり。二人の詠ずる所は、その師の如く萬葉調にあらずして、古今風に交ふるに新古今風を以てしたるもの、その優雅なる格調のうちには、おのづから江戸泰平の寛濶にして悠々たる趣を味ひ得べし。當時、京の文壇に於て、香川景樹の歌道を一新したる功は特筆大書せざるべからず。景樹の歌論は、意は古の誠實なるに倣ひ、詞は今の通じ易きを取り、殊に聲調を重んずべしといふにあり。調とは人心の祕奥より流れ出づる悲喜の情の口に上り辭となりて、自ら音節を具するもの是なり。その派を桂園流といひ、大

いに世に行はれたり。

この他幕末の歌壇に最も異彩を放てるものは、越後の僧良寛、福井の井出曙覽、福岡の大隈言道等なり。これらの人は、従來諸派の類型を脱し、全く独自の歌境に立てり。その構想の洒落輕妙なる、その觀察の微細奇抜なる、その句法の嶄新にして自由なる、正に一生涯を開けるものといふべし。

けふの日ものどけさしるく東雲の霞に匂ふあか星の影	千蔭
打群れて賤が刈りとる声間より見えがくれする難波菅笠	春海
夏川のみくま隠れのみだれ藻に夜咲く花は螢なりけり	景樹
めせやめせ夕げの妻木めせやめせ歸るさ遠し大原の里	景樹
たらちねの母がみ國と朝夕に佐渡が島べを打見つるかな	良寛
凡人の耳には入らじ天地の心を妙にもらすわが歌	曙覽

良寛
天保二年(三四九)
歿 年七十五

井出曙覽

明治元年歿
年五十七

大隈言道

明治元年歿
年七十一

風の梅斜に吹きて散りぞ入る、葉うつ戸口、牛ほゆる窓。
傘させるさゝぬも過ぐる橋の上の夕暮近き雨のはれがた。言道
窓に窓ひかひあひたる大船の一夜どなりの懐かしげなる。

和歌の想の滑稽にして詞の卑俗なるものを狂歌といふ。滑稽
趣味の歌は既に萬葉集にこれあり、それより往々これを詠ずる
ものあり。江戸時代に入りては、泰平の氣特にその振興を促し、
寶曆前後より化政度にかけて狂歌師一時に輩出す。中にも四
方赤良和漢學の根柢あり、最も滑稽の才に富み、戯謔口を突いて
出でたり。

春霞立ちくたびれてむさし野のはら一椀にのばす日の脚。赤良
雀殿あやどはどこか知らねども、ちよつとごされさゝのあ
ひ手に。

同人

四方赤良
太田南畝蜀山人
文政六年(三四三)
歿
年七十四

一つとり二つとりては焼いて食ふ鶉なくなる深草の里。同

第四 俳諧

江戸幕府の世に俳諧の興りて、連歌より獨立せるは、實に京の人
松永貞徳の唱道によれり。されどその作なほ幼稚なり。この
一派を古風と稱す。ついで西山宗因大阪に起り、舊格を打破し
て放縱なる一體を創む。之を檀林風といひて、一時大いに行は
れたり。宗因は才氣縦横、辭藻口を衝いて發せりと雖も、内容は
之に伴なふ能はざりき。要するに、古風と檀林風とは平民文學
として俳諧を廣めたるをその功とすべきのみ。

しをるゝは何かあんずの花の色。貞徳
雪月花、一度に見するうつぎかな。同
世の中や蝶々とまれかくもあれ。宗因

松永貞徳
承應二年(三二二)
歿
年八十三
西山宗因
天和二年(三四〇)
歿
年七十八

北村季吟

松永貞徳の門人

湖月抄等の著者

寶永二年(三三五)

歿年八十八

初花や急ぎ候ほどに、これははや、
しら露や無分別なるおきどころ。

同 同

元祿に至り、革新の旗を翻して天下の俳風を一變したりしは松尾芭蕉なり。芭蕉は伊賀の人、京に出て、北村季吟の門に古風を學び、又流行を追うて檀林風を弄ぶ。後江戸に來りて正風を起し、また東西に周遊してその風を擴む。詠ずるところ人事よりも自然に多く、幽玄清澹にして廣く雅俗にわたる。芭蕉の句は壯より老に及びて三たび變化せり。漢語を用ふること多く、絢爛の趣ありしはその初なり、花實併せ得んことを欲して苦心慘憺たりしはその中なり、切瑳琢磨の切を終へて成る所却て平易に言ふべからざる味を有するに至れるはその終なり。されど一たび古池の響に得たる信仰は生涯を通じて變ぜず、よく俳

榎本其角

寶永四年(三三六)

歿年五十六

服部嵐雪

寶永四年(三三六)

歿年五十四

諧をして李杜の詩、西行の和歌と比較して軒輊するところなきに至らしめたり。四方翕然として靡き、俳諧これより遍く都鄙に行はる。門人には豪放なる榎本其角、溫和なる服部嵐雪等俊秀の士諸國に多し。

その後、風調漸く卑俗に流れしかば、天明の頃、これを慨して革新を唱ふるもの東西に起れるが中に、京の與謝蕪村その最たり。蕪村畫を善くし、飄逸洒脫、自ら謂へらく、われに師なし、自然を以て師とす。かくて、畫俳相俟ちてその才を發揮せり。蕪村好んで自然の景物を詠じ、漢詩の趣を傳へ、またよく歴史的事實を材料とす。芭蕉は靜寂の趣を得るを以て旨とせしが、蕪村は進んで活動の態を捉へんとし、人事の消息、時間の經過をも寫さんとせり。要するに蕪村はその句を活躍せしめ、又複雑ならしめ

與謝蕪村

天明三年(三四三)

歿年六十八

横井也有
天明三年(1822)
歿
年九十二
柄井川柳
寛政二年(1820)
歿
年七十三

たるなり。芭蕉と相並んで斯道の二聖とすべし。横井也有は尾張侯の臣、其の俳文は特に淡雅輕妙を以て聞ゆ。天明のころ柄井川柳巧に人生の弱點を捕へ、これを落首卑近の句に仕立て、皮肉なる諷刺を試みたり。所謂川柳點是なり。亦これ江戸泰平の氣運に乗じたるものに外ならず。

梅が香にのつと日の出る山路かな、

翁

ところ／＼に雉子の啼き立つ、

野坡

家普請を春の手すきに取りついて、

同

かみの便にあがる米の値、

翁

宵のうちはらくとせし月の雲、

同

藪越出咄す秋のさびしき、

坡

花の雲、鐘は上野か淺草か、

芭蕉

藻にすだく白魚や取らば消えぬべき、

同

名月や池をめぐりて夜もすがら、

同

菊の香や奈良には古き佛たち、

同

旅人と我が名よばれん初時雨、

同

雁の腹見送る空や舟の上、

其角

からびたる三井の仁王や夏木立、

同

ぬれ縁や薺こぼるゝ土ながら、

嵐壽

名月や烟這ひゆく水の上、

同

袴貫を足でぬぐ夜や朧月、

蕉村

柳散り、清水涸れ、石處々、

同

秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者、

同

易水にねぶか流るゝ寒さかな、

同

第五 戯曲

戯曲は謠曲等より出て、江戸時代に至りて大いに發達せり。元祿の頃近松門左衛門あり、京に住み、のち大阪に移り、盛に淨瑠璃を作る。淨瑠璃には時代物と世話物とあり。時代物はその舞臺を過去に取り、世話物は目前現在の出來事を仕組む。近松が全力を盡し、は時代物にしてその量も十の八を占む。されど今日不朽の價値ありと認めらるゝは寧ろその世話物にあり。寫す所、人情の秘奥を穿ち、才藻涌くが如く、行筆の自在なること行雲流水に似たり。ついて竹田出雲あり、文才は門左衛門に及ばずと雖も、趣向の變化に富めることは却て之に勝れり。今日世に行はるゝはその作に多し。近松半二はまたその門に出づ。

第六 小説

竹田出雲
享保十二年(一七二七)
歿
年八十一
近松半二
天明三年(一八二二)
歿
年九十九

曲亭馬琴
瀧澤解
嘉永元年(一八二〇)
歿
年八十二

小説は元祿の頃、京阪に榮えたり。井原西鶴、大阪に出て、數多の浮世草子を著し、從來の幼稚なる小説を一轉して、巧に世間の風俗、人情を寫せり。その文、輕妙奇抜にして、法格に拘らず、社會の裏面を描きて、微細を極む。殊に晩年、町人社會を寫せるものに至りては、圓熟の境に入りたるものゝ如し。文化、文政の頃に至り、江戸に作者輩出せり。中にも曲亭馬琴は學問該博にして、文藻絢爛なり。椿説弓張月、里見八見傳等、その作の人口に膾炙するもの多く、一篇出づる毎に、世人争うてこれを求む。その趣一に儒教によりて、勸善懲惡を旨とせり。従つて人物の類型的にして、個性の發揮に乏しく、極端なる善惡の權化にして、人間味を缺如せるが如きは、避くべからざる短所なり。されどその結構の雄大にして、變化に富み、波瀾の重疊たるはそ

十返舎一九
天保二年(三〇九一)
式亭三馬
年五十七か
文政五年(三〇八二)
年四十八

の類希なりと謂ふべし。このころ、滑稽小説に名を得たりしは江戸の十返舎一九式亭三馬なりき。一九の膝栗毛は旅の恥を書きずて、三馬の浮世風呂、浮世床は化政の社會を直寫して苦笑せしむ。

之を要するに、江戸時代ばかりその量に於てもその質に於ても、上下貴賤各種の階級に通じて、豊富なる文學を供給せるは前後に比なし。而して又その形式、内容共に先例の桎梏を脱し、直接に自然と人生とに應接して自由にその感想を述べ、以て能く明治文學を産み出すに至れり。(新體日本文學史教科書に據る)

五 明治時代の文學

第一 小説

維新の偉業正に成りて開國の國は一たび定まるや、世間は西洋の物質的文明の輸入に急にして、和漢の學術、技藝を顧みるに遑あらざりき。況や美術、文藝のことの如きは全く無用の長物とせられて、幾多の國寶は破棄せられ、無数の古典は廢紙となりぬ。此の間にあつて纔かに微光を發せしものは、獨り新聞紙なり。新聞紙の刊行は、これを西洋に學びしものにして、當初は専ら政治論の機關たり、實用功利の論に非ざれば、以て時代思潮に追隨するに足らずとなしたりき。されど普通教育の制度漸く國內に普くして、文學の知識が中流以下の社會に擴張せらるゝと共に、新聞紙の經營者も亦是等の讀者に對して其の娛樂となるべき文藝の作物を供給せざるべからざるを知りぬ。かくて幕末

佳人の奇遇
東海散士榮四朗
著
雪中梅
鐵腸來廣重恭著
經國美談
龍溪矢野文雄譯

以降久しく失意の地にありし戯作者が所謂續き物と稱する合
卷風の小説を紙上に掲げ初めしは、蓋し明治文學の萌芽なり。
從來筆を政治論にのみ執りたりし人々も、此の種の文藝の人心
に影響することの速かなるを認めて、或は英佛の政治小説を翻
譯し、或は新に架空の脚色を立て、自家の主張を具體的に説明
せんことを企てたり。佳人の奇遇、雪中梅、經國美談等は當時最
も喧傳せられしものにして、慷慨激越の調時に青年者流を感奮
興起せしむるものなきにあらざりしかど、その豪放粗大の文は
未だ人情の機微に入らず、文學の眞諦を得たりといふに足らざ
りき。
さもあれ、明治は既に十七八年を経たり、西洋の學術も技藝も稍、
咀嚼せられたり。世の先覺者はかの徒らに物質の皮相にのみ

硯友社
明治十八年尾崎
紅葉山田美妙齋
川上眉山等の結
んだ文學同好の
會

腐心するの愚なるを悟りぬ。文藝美術の評價も日に漸く高か
らんとせり。この勢に乗じて、坪内逍遙等が文學論の出づるあ
り、硯友社一派の新に旗幟を樹つるあり、在來の戯作者系の人々
もこれに呼應して起てり。こゝに謂はゆる才筆家にもあらず、
政論家にもあらず、熱誠なる態度を以て直に人生を描破せんと
する者は、將に踵を接して出でんとせるなり。
思ふに新文藝の勃興は半ば西洋文藝によりて啓發せられたり。
されども他の一半は我が國の古文學に淵源せるものなること
を忘るべからず。蓋し維新以來萌し來れる西洋文明謳歌主義
は此に其の極に達して、その反動たる國粹保存論は盛に唱道せ
られ、國語教育の奨励、古文學の研究が隆昌を極めしはあたかも
この頃なりき、されど、新文藝の先達は、嘗に西洋の文學のみな

らず、我が國の古文學に回顧し、或は中古の文學に私淑するあり。或は元祿文學に摸倣するあり。我が文壇の泰斗として新篇出づる毎に洛陽の紙價を貴からしめし尾崎紅葉と幸田露伴とはともに西鶴を學びてその新文體を創めしものなりき。紅葉が艷麗の致は才人の情緒を寫すに長じ、露伴が遒勁の調は巧に男兒の意氣を描きぬ。されど、その題材は、稍、單調なりき。良、久しうして世間はその反復に倦みぬ。乃ち變化を求めて、或は探偵小説、冒險小説、俠客小説等の複雑なる脚色に喝采し、或は慘憺たる事件を敘したる所謂觀念小説、悲痛なる苦悶を抒べたる所謂心理小説を歓迎し、その取材は日にく、人生の暗黒面に向つて進み去らんとせり。その間或は光明小説といひ、家庭小説と號する道德的傾向ある作物の行はれしものなきに非ずと

雖も、皆膚淺陳套、未だ人心の要求をみたすに、足らざりき。

この時に方りて、東洋の一小島國は日清、日露の大役を経て、俄然として、一等國の伴に伍せり。國民の自覺と共に歐洲文學の思潮は盛に輸入せられ、現實を凝視し、人生の眞を寫すを以て文學の主要なる職分なりとするに至れり。この播種者は二葉亭四迷なるが、自然主義の勇將として此の時代に活躍したるは國木田獨步、島崎藤村、田山花袋等なりき。而して一面、坪内逍遙、森鷗外二人は依然としてその長老たる位置と活動とを失はざりき。

第二 和歌

上來、主として小説の變遷を敘したり、最近の文壇に於て最も注目すべきはこの種の文藝なればなり。さもあれ、上古以來常に流行し來りし抒情敘景の小詩形も亦甚だ衰へたるにはあらず。

蒼虬
成田氏
俳人
天保十三年(一八四二)歿
梅室
年八十三
櫻井氏
俳人
嘉永元年(一八二〇)歿
落合直文
明治三十六年歿
年四十三

伊藤左千夫
大正二年歿
年五十

歌道には桂園の流を汲む者多く、俳道には蒼虬梅室の門派のみ獨り盛にして、和歌俳句といへば、専ら活社會と交渉なき閑人隱者の間に行はれしもの、明治初年の大勢なりき。かの國粹保存の論、國文學の研究等盛なりし時に至りて、落合直文等とその門下生との手によりて、歌道はまづ青年社會に入り來りぬ。かくて偏に風雅を生命とせる月花の天地を小なりとして、活社會の人生を歌はんとする傾向を生ぜり。

次いで正岡子規は俳句革新の餘力を以て短歌革新の叫をあげ、萬葉集を揚げて古今集以下を斥け、客觀寫生を入門として實生活の印象を詠み出づべしと唱へたり。その主張は伊藤左千夫等によりて繼承せられ、以て大正歌壇の一勢力をなすに至れり。

第三 俳句

河東碧梧桐
名は兼五郎
明治五年伊豫松山生

外山博士
名は正一
東京帝國大學文科大學長
文部大臣
文學博士
明治三十年歿
年五十三

俳道には正岡子規出づるあり、天保の月並的俗調を排して天明の蕪村調を高唱し新聞日本に據りて天下に呼號せり。子規は從來の傳統を破り、専ら獨自の見解を以て蕪村芭蕉等を研究批判し、進みて眞實の描寫を鼓吹し、營に句のみならず寫生文と稱する小品文の流行をも促しぬ。門下に高濱虚子河東碧梧桐あり。またこの流より出でて筆を小説に着けたるものに夏目漱石等あり。

第四 新體詩

この他、明治の新文藝としては別に新體詩あり。當初は明治十五年ごろ外山正一等が試みたる新體詩抄の調なりしが、その詞藻の稍乾燥なるに嫌焉たる者は中古語を以て、西歐の詩趣を傳へんとするあり、或は漢語を用ひて五七の單調を破らんとする

天地有情
土井晚翠の詩集
明治三十二年に
出た

福澤雪池
福澤諭吉
福地櫻痴
名は源一郎
新開記者
明治三十九年歿
年六十六
成島柳北
新開記者
名は弘
明治十七年歿
年四十八

もあり。三十年に至り、島崎藤村・土井晚翠二人嶄然として頭角を見し、藤村詩集は温雅優美の調を以て、天地有情は縦横跌宕の風を以て、最も青年の間に喜ばれたり。

第五 散文

更に純文藝の範囲を出でて専ら一代の文章の模範となりしものを求むるに、かの漢文直譯風の文章が流行したりし日に於ても既に福澤雪池・福地櫻痴・成島柳北等の平易明快なる文字あり。降つては、三宅雪嶺・坪内逍遙・森鷗外・高山樗牛・大町桂月等あり。その文各特色あり、長短ありと雖も、皆縦横自在にしてよくその言はんとする所を言へり。

明治維新の當時は舊物破壊の氣勢甚だ猛に、江戸時代の平易なる通用文體を一變し、佶偲なる漢文直譯體の文を以て普通文と定め、法令制度より論說記事悉くこれによることとなり、随つて文藝小説もまた多くこの文體を用ひたり。されどかゝる不自然なる文體は永く勢力を有すべきにあらず。明治二十年ごろ山田美妙・齋二葉亭四迷二人相前後して言文一致體の小説をものしたる當初に於てこそ是非の論世上に喧しかりしか、三十二年正岡子規が寫生文を提唱せるころより次第に文壇の勢力となり、次いで自然主義作家の輩出して現實描寫をつとむるに至り、自ら口語體は一般文學を風靡するに至れり。普通文といへば最初は漢文直譯體の文を指すことなりしが、後にはいつとはなしに口語體の文と理會せらるゝことゝはなれり。また以て文體の變遷を見るべし。

明治の社會が日本に於ける空前の變化なると同じく、明治の文

學も亦從來に見るべからざる一大變化をなしたるなり。約言すれば明治以前の文學は概して理想的、技巧的、典據的なるに對し、明治の文學は少なくとも現實的、自然的、慣習打破的に進まんとする傾向を有せるものと謂ふべし。(佐々醒雪の文を參酌す)

六 現代の文學

第一 小説

大正の文學は、自然主義文學の衰潮に乗じてその曙光を發し來りぬ。而も、明治の末期に至るまで田山花袋、島崎藤村、徳田秋聲、正宗白鳥等の作家は、各特色ある制作を出して、自然主義は、依然として文壇の主流をなせる觀ありき。この間に立ちて、唯一人

徳田秋聲

名は末雄

小説家

明治四年加賀金

澤生

正宗白鳥

名は忠夫

小説家

明治十三年岡山

縣和氣郡生

滔々たる大勢の外に超越し、最後まで自己の個性を護り、異彩ある作品を多く出したる者を夏目漱石とす。吾人はこゝに大正當初の文壇の一重鎮として、漱石の名を特筆せざるべからず。漱石の才能は多面多様にして、内容によりて様式を變化し行き、特にその初期と晩年とは作風を殊にしたるために、容易に一の主義を以てこれを掩ふこと能はず。たゞその如何なる傾向を擇ぶにもせよ、悉く自然主義と立場を異にし、或は全く之と正反對に出でたり。自然派が頻に自己の作品の人生第一義に觸れたりと稱するや、彼れ謂へらく、その第一義とは生死海中に在りての第一義なり。若し生死の關門を打破して生死を眼中に置かざる人生觀を立し得とせば、彼等の所謂第一義は却て第二義に墮するにあらずや」と。評者或は漱石の態度を目して禪的と

武者小路實篤

思想家

文學者

明治十年東京生

トルストイ

Tolstoy (1828-1910)
ロシアの小説家
思想家

ドストエフスキ

Dostoyevky (1821-1881)
ロシアの小説家
劇作家

いひ、俳諧的と稱し、低徊趣味と名づく。蓋し、その最も優れたる傾向は、英國派心理小説の脈絡を引ける作品にあるべし。ともあれ、その明色と倫理的意識と東洋趣味的の冲澹とは、相俟つて自然主義の暗色より救はれんと欲する讀者に多大なる慰安を與ふる力の籠れるは争ふべからず。曩に歐米文學の翻譯紹介をして文壇を啓發せる森鷗外は、卓然たる識見を持して歴史小説を創作し老熟の筆致、よく彼れの該博なる學殖と毅然たる人格とを示せり。この他に耽美派と稱せらるゝもの、前に永井荷風あり、後に谷崎潤一郎あり。その官能描寫の藝術的色彩と芳香とは、克く人心を惹くものあり。當時、正面より自然主義に對抗して、來るべき時代精神の一面を暗示したるは武者小路實篤を始とし、何れも白樺派の人々なり。

タゴール

Tagore (1861-)
印度の詩人

ロマンローラン

Romain Rolland (1866-)
佛國の小説家
戯曲家

カーペンター

Carpenter (1814-)
英國の思想家

オイケン

Eucken (1846-)
ドイツの哲學者

ベルグソン

Bergson (1859-)
佛國の哲學者

白樺派は、人道愛と個人的生命の光明とを高調する新理想主義の一團なり。その人生に對する態度は、畢竟肯定的にして、人類の將來は内部生命の飛躍によりて、無限の幸福に向ひ得べしといふが其の信條とする所なり。顧みるに明治末期より大正初期にかけて、著しき興味を以て我が思想界に歓迎せられたるは、露國のトルストイ及びドストエフスキの論文作品にして、更に印度のタゴール、佛のロマン、ローラン、英のカーペンター等の思潮雜然として流れ入り、尙之に加ふるに獨のオイケン、佛のベルグソンの新哲學を以てせり。蓋し白樺一派の藝術思想はこれら文學及び哲學の感化によること最も多し。これらの思潮は飽くまで人間心靈の勝利を基調とし、創造的進化の新生活を謳歌することに於て到底人生の些事或は機械的なる運命觀に

のみ停滯せる自然主義と相容るゝものにはあらざりき。
 かく新理想主義の一方に崛起すると同時に、自然主義に取つて
 代りし藝純術派の諸新人は、皆現實主義の信徒たりき。現實主
 義といひ、寫實主義といひ、同じくりヤリマムの名に於て呼ばる
 れども、二者は元來その趣を異にせり。寫實主義は初めより主
 觀を交へず、専ら外面より事象を描かんとするものなれども、現
 實主義は、觀照に於ては科學的精確を尊ぶに拘らず、批判と省察
 とは飽くまでも嚴肅なる主觀に於てせんとするものなり。而
 して我が國現代の作家は、深淺の差こそあれ、多くはこの主義に
 據るものゝ如し。先に或は自然主義派に屬し、或は新理想主義
 派に數へられ、或は漱石の流を汲めるものにして、今日この現實
 主義に入るべきものもあり。菊池寛、芥川龍之介が冷靜なる理

志賀直哉
 明治十六年宮城
 縣石巻町生
 甲見亭
 本名山内英夫
 明治二十一年横
 濱生

智によりて人間心理と人生の現實相との矛盾を諷刺し、或は之
 に新解釋を與へんとし、志賀直哉、里見弴等が精練せる筆致を以
 て如實の自然を渾然たる藝術として創造する如き、その他の作
 家いづれも各自の個性に即して、創作を試むれども、概して現文
 壇の中心は現實主義を出でずといふべし。

猶最近の文學に於て注意すべきは社會改造の思潮なり。即ち
 世界大戰は、その結果として無数の新思想と新しき社會鬭争と
 を誘發したるが、中にも産業組織の研究より起れる無産階級の
 自覺は、その思想の表現を藝術に求めんとして、所謂無産階級の
 藝術を提唱するに至れり。たゞ思想の宣傳に急にして藝術的
 感情の稀薄なるを以て未だ見るべき作品を出すに至らざるが
 如し。然れども之を機として、現代の日本文學は一般に社會意

識と時代觀念とを含むこと少なしとの聲高く、且その點に於て、既成藝術に對する局面を轉回せざるべからずと唱ふるもの多きを加へたるは注意するを要す。

第二 戯曲

詩歌小説に比して劇文學の後れがちなるは何れの國に於ても然り。これ蓋し演劇は多數觀客を相手とするより演出上容易に根本的革新を許さざるが故なり。日清役後、坪内逍遙は史劇の新作を試み、森鷗外は西歐諸國の新劇を紹介したれども、之を實演することは至つて少なかりき。明治末期に於ける坪内逍遙の文藝協會、小山内薫等の自由劇場、その他演劇に關する實際的啓蒙運動の起りしより、近年劇に對する興味は漸く文壇の中心をなし、戯曲の創作を試むるもの次第に増加せり。思ふにこ

の興味は、年を逐うて益々盛なるべし。たゞ新脚本の實演は容易ならざる爲に、小説の如く速かにその成長を見ることなしと雖も、已にこの方面にも幾人かの新進作家を出し、その作品には我が國劇文學の先驅として鑑賞すべきもの少なしとせず。

第三 詩歌

短歌長詩の壇上には幾多の新人の輩出するあり。明治時代に於て、落合直文、正岡子規等が革新の鋤鋏を加へたる短歌の野は、大正の今日に至りて、いよ／＼百花繚亂の盛況を呈せり。即ち幾多の短歌雜誌は刊行せられ、よく個性を歌ひ、實生活を詠じ、その用語に、取材に、各特色ある歌風を示せり。中にも與謝野寛夫妻の「明星」の復活と齋藤茂吉、島木赤彦等の「アラ、ギ」派の流行とは最も注目に値すべし。

長詩壇も三木羅風、北原白秋等の専門作家の外に他の藝術家の之を試むるものもありて亦甚だ賑へりと謂ふべし。たゞ未だ眞の國民詩として誦すべきものなきに似たれど、その詩境著しく向上し、清新にして光明に富み、諷誦するに足るもの尠なしとせず。又、童話文學と共に、新童謡の勃興せるは、兒童の世界の爲にも喜ぶべく、この點に於て北原白秋、葛原鹵等の功没すべからず。俳壇には曾て高濱虚子等が正岡子規の築きたりし「ホト、ギス」の古壘を守るあり。外に「海紅」に據れる河東碧梧桐「層雲」に據れる荻原井泉水等の一派は、全く從來の季題趣味を脱し、自由に觀照の世界の一閃を捕へて之を印象的に吟じ出すを以て、同好者の共鳴する所たれども、その大成は尙將來に期すべきにあらざるか。

第四 歐米文學の翻譯

最後に一言すべきは、歐米文學の翻譯が益盛なることにして、これまた現代藝術界一般の要求を示せるものなり。近年我が印刷術の進歩は、世界如何なる國の文學をも身由に移植せしめ、我が國民をして坐らにして世界藝術博物館の廻廊に立つ思あらしむ。大正の初頭厨川白村「近代文學十講」を著し、西歐文學の諸流派を啓蒙的に説述するや、忽ち數十版を重ねたる事實に見るも、當時我が讀書界が、いかに新欲望に驅られたるかを知るべし。さはれ、我が文壇が歐米文學の精を含み、粹を咀ひて、之を我が國古來の文學の基礎の上に置き、以て新日本文學を建設するは果して何れの日ならん。吾人は日本文學が、世界藝術の上に一の光明となり更にその光明の反射によつて我が國民の藝術的觀

文 部 省 檢 定 濟

大 正 五 年 三 月 十 七 日 師 範 學 校 國 語 科 教 用

大正十四年十月二十七日印
 大正十四年十月三十日發
 大正十五年三月十三日訂正再版發行
 大正十五年三月十三日訂正再版發行



印 發 行 者 兼

上 原 才 一 郎

東京市神田區通神保町六番地

編 者

吉 田 彌 平

東京市小石川區高田老松町五十二番地

發 行 所

光 風 館 書 店

東京市神田區通神保町六番地

(電話 神田三〇八七番)
 (振替口座東京三二七番)

本館發行 of 教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に
 賣切等にて課業に御差支の節は直接御註文被下候は、直に御送附可致候

卷一	卷二	卷三	卷四	卷五	卷六	卷七	卷八	卷九	卷十
金六十六錢	金六十一錢	金六十錢	金五十八錢	金五十六錢	金五十八錢	金六十六錢	金六十六錢	金六十六錢	金六十六錢

師範國文第一都用卷十

(行印社會式株刷印治明)

師範國文第一都用卷十

合

念の一層崇高の域に進められんことを切望して已まざるなり。
 (千葉龜雄の文を參酌す)

師 範 國 文 第 一 部 用 卷 十 終



庫
6
60

広島大学図書
2000302260
